

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告111

富山市  
四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡  
発掘調査報告書

- 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -

2023

富山市教育委員会



調査地区全景（上層完掘、空撮、南東から）



調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、東から）



調査地区全景（上層完掘合成、空撮、南東から）



調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）



調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、北東から）



SK95 土師器塊出土状況（北から）



SK125 白磁碗出土状況（東から）



SK1001 弥生土器出土状況（東から）



SX1132 石器出土状況（北から）



弥生土器 (SK1001ほか)



土師器塊 (SK94・95)

## 例　　言

- 1 本書は、富山県富山市四方荒屋に所在する四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社クスリのアオキ四方店建設に伴う発掘調査である。
- 3 調査は、株式会社クスリのアオキから有限会社毛野考古学研究所富山支所に発注し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと実施した。
- 4 本書で報告する調査の概要は次のとおりである。

調査面積	2,380 m <sup>2</sup> (四方背戸割遺跡 660 m <sup>2</sup> [ 上下層延べ 1,320 m <sup>2</sup> ] 、四方荒屋遺跡 1,060 m <sup>2</sup> )
発掘作業期間	令和 4 年 8 月 29 日～11 月 21 日
整理作業期間	令和 4 年 11 月 22 日～令和 5 年 9 月 30 日
監理担当者	堀内大介 (富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 専門学芸員 (令和 4 年度)・主幹学芸員 (令和 5 年度))
発掘作業担当者	常深 尚 (有限会社毛野考古学研究所富山支所)
整理作業担当者	常深 尚 (有限会社毛野考古学研究所富山支所)
- 5 調査にあたっては、次の方々よりご協力をいただいた。記して謝意を表します。  
(株)エム・ティ・プラン (公社)富山県シルバー人材連合会 (株)布村土建 四方荒屋地区
- 6 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を第 4 章に掲載した。
- 7 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 本書の執筆は、第 1 章・第 2 章を堀内、第 3 章・第 5 章を常深が行い、編集は常深が行った。文責は文末に記した。

## 凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系である。挿図の方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1995 年後期版』に拠る。
- 3 遺構表記は、溝・烟跡 : SD, SF : 道路跡 土坑 : SK、ピット : SP、不明遺構 : SX を用いた。
- 4 写真の縮尺は不統一である。
- 5 遺物実測図の縮尺は、原則 1/3 である。
- 6 挿図中の網掛けは、次のとおりである。

遺物  赤彩  煤・黒色処理  油煙 

- 7 第 4 図は国土地理院発行 2 万 5 千分 1 地形図をもとに作成した。

# 目 次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査にいたる経過 .....	1
第2節 試掘調査の経過 .....	1
第3節 発掘調査にいたる経過 .....	1
第4節 出土品整理の経過 .....	1
第5節 周辺の調査状況 .....	3
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 調査の方法と成果 .....	8
第1節 調査の方法 .....	8
第2節 層序 .....	8
第3節 遺構 .....	9
1 上層遺構 .....	9
2 下層遺構 .....	29
第4節 遺物 .....	34
1 上層出土遺物 .....	35
2 下層出土遺物 .....	38
3 試掘調査出土遺物 .....	41
第4章 自然科学分析 .....	44
第1節 放射性炭素年代測定 .....	44
第5章 総括 .....	47
第1節 弥生時代 .....	47
第2節 平安時代 .....	48
第3節 中世 .....	49
第4節 近世 .....	49
引用・参考文献 .....	52
写真図版	
報告書抄録	

## 図 目 次

第1図 試掘調査トレンチ位置図	2	第21図 煙跡断面図（1）	27
第2図 四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡調査区位置図	3	第22図 煙跡断面図（2）	28
第3図 神通川の河口変遷図	4	第23図 下層調査区全体図	29
第4図 周辺の遺跡分布図	6	第24図 下層遺構図（1）	30
第5図 基本層序	9	第25図 下層遺構図（2）	31
第6図 基本層序・地震痕・SD30・SA203位置図	10	第26図 下層遺構図（3）	32
第7図 上層調査区全体図	11	第27図 下層土坑遺構図	33
第8図 上層遺構図（1）	12	第28図 下層溝遺構図	34
第9図 上層遺構図（2）	13	第29図 下層不明遺構遺構図	35
第10図 上層遺構図（3）	14	第30図 上層出土遺物図（1）	36
第11図 上層遺構図（4）	15	第31図 上層出土遺物図（2）	37
第12図 上層遺構図（5）	16	第32図 下層出土遺物図（1）	39
第13図 上層遺構図（6）	17	第33図 下層出土遺物図（2）	40
第14図 土坑遺構図（1）	18	第34図 試掘調査出土遺物図	41
第15図 土坑遺構図（2）	19	第35図 历年較正結果	46
第16図 溝・道路跡 SF201変遷図	20	第36図 弥生時代中期の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡	47
第17図 溝・道路跡 SF201遺構図	21	第37図 古代道路推定図	48
第18図 溝・道路跡 SF202 遺構図	22	第38図 中世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡	50
第19図 煙跡（東西歛）	25	第39図 近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡	51
第20図 煙跡（南北歛）	26		

## 表 目 次

第1表 遺物観察表(1)	42	第3表 遺物観察表(3)	44
第2表 遺物観察表(2)	43	第4表 放射性炭素年代測定結果	46

# 図版目次

- 卷頭図版 1 遺構  
調査地区全景（上層完掘、空撮、南東から）  
調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、東から）
- 卷頭図版 2 遺構  
調査地区全景（上層完掘合成、空撮、南東から）  
調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）
- 卷頭図版 3 遺構  
調査地区全景（四方背戸割道路下層完掘、空撮、北東から）  
SK95 土師器塊出土状況（北から）  
SK125 白磁碗出土状況（東から）  
SK1001 弥生土器出土状況（東から）  
SK1132 石器出土状況（北から）
- 卷頭図版 4 遺物  
弥生土器（SK1001ほか）  
土師器塊（SK94・95）
- 写真図版 1 遺構（1）  
調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）  
調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、北西から）
- 写真図版 2 遺構（2）  
調査地区全景（四方背戸割道路下層完掘、空撮、北東から）  
調査地区全景（四方背戸割道路下層完掘、空撮、南東から）
- 写真図版 3 遺構（3）四方荒屋遺跡  
調査区南東部（北東から）  
調査区南東部（南東から）  
調査区北東部（北から）  
調査区北東部（東から）  
調査区北部（北から）
- 写真図版 4 遺構（4）四方荒屋遺跡  
調査区南東部（北東から）  
調査区北東部（東から）  
調査区南東部（北から）  
調査区北西部（北東から）
- 写真図版 5 遺構（5）四方荒屋遺跡  
K6 区（北東から）  
K9 区（南西から）  
K13 区（南西から）  
SK94 完掘（西から）  
SK95 完掘（北から）  
SK125 完掘（東から）  
SK130 完掘（北西から）  
SK131 完掘（南東から）
- 写真図版 6 遺構（6）四方背戸割道路上層  
調査区北東部（北東から）  
調査区北東部（北から）  
調査区北東部（北東から）  
調査区北東部（北から）  
調査区北東部（南東から）
- 写真図版 7 遺構（7）四方背戸割道路上層  
SD01・164 完掘（SF201、東から）  
SD01 完掘（東から）  
SD09・14 完掘（SF202、北から）  
帆瀬底面の凹凸（北から）
- 写真図版 8 遺構（8）四方背戸割道路下層  
調査地区全景（北から）  
調査区北東部（東から）
- 写真図版 9 遺構（9）四方背戸割道路下層  
調査区北東部（北から）  
SK1001 完掘（北から）  
SK1001 遺物出土状況（東から）  
SK1001 内土坑完掘（北東から）  
SD1169 完掘（南東から）
- 写真図版 10 遺構（10）四方背戸割道路下層  
SX1176 完掘（東から）  
SX1176 完掘（北から）  
SX1205 磁出土状況（北から）  
SX1132 石器出土状況（東から）  
地割れ・噴砂検出状況（東から）  
噴砂断削（北西から）
- 写真図版 11 遺物（1）四方荒屋遺跡  
SK94・95・125、SD01・115・118・120・176、確認面、  
残土出土遺物
- 写真図版 12 遺物（2）四方背戸割道路  
SK163、SD01・09・14・30・49・151・161・164・  
166・170、SP144、残土、複乱、トレンチ埋土出土  
遺物
- 写真図版 13 遺物（3）四方背戸割道路  
SK1001、SD155、SP156、確認面、IV層出土遺物
- 写真図版 14 遺物（4）四方背戸割道路、四方荒屋遺跡  
SD174、SX1132、試瓶調査出土遺物

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査にいたる経過

四方荒屋遺跡・四方背戸割遺跡は、昭和63年～平成3年度に富山市教育委員会（以下、富山市教委）が実施した分布調査の結果を受け、平成5年刊行『富山市遺跡地図（改訂版）』に「四方荒屋遺跡」（No.201014）、「四方背戸割遺跡」（No.201015）として登載された。平成25年刊行『富山市遺跡地図』には、遺跡番号を「四方荒屋遺跡」（No.2010026）、「四方背戸割遺跡」（No.2010027）に変更して登載された。

令和4年4月26日、株式会社クスリのアオキから店舗建築に伴い、埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。対象地6,411m<sup>2</sup>が埋蔵文化財包蔵地に含まれており、試掘調査を実施することとした。

### 第2節 試掘調査の経過（第1図）

試掘調査は、株式会社クスリのアオキの協力を得て令和4年5月30日～6月3日に富山市教委埋蔵文化財センターが実施した。試掘トレンチを12箇所設定し、重機によって遺構面までの掘削を行った。周辺調査から下層遺構の存在の可能性も想定されていたことから、トレンチの一部を掘り下げて下層遺構の確認作業も行った。その結果、調査対象範囲全域6,411m<sup>2</sup>で上層に古代の掘立柱建物、中世～江戸時代の溝（畑）、柱穴、土坑などを検出し、下層に弥生時代の溝を検出した。遺物は、弥生土器、古代の土師器・土錐、中世のかわらけ・珠洲、江戸時代の唐津が出土した。

試掘調査や周囲の調査状況から試掘調査範囲の北部の下層には旧河川跡と思われる浅い埋没谷が存在し、その谷の南側微高地に弥生～古墳時代の集落が広がることが分かってきた。このような遺構の分布状況から、弥生～古墳時代の集落が広がる試掘調査範囲南部を「四方背戸割遺跡」とし、下層遺構がない北部を「四方荒屋遺跡」として遺跡範囲を修正した（第2図）。修正後の埋蔵文化財包蔵地面積は「四方荒屋遺跡」が104,468m<sup>2</sup>、「四方背戸割遺跡」が121,773m<sup>2</sup>である。

### 第3節 発掘調査にいたる経過

工事対象範囲全域で埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財の保護措置について施主である株式会社クスリのアオキと協議した。その結果、店舗の工事計画のうち、擁壁・建物基礎・地中梁、付帯設備、地下水貯留槽、集水井の掘削工事が下層遺構面まで到達するため、埋蔵文化財を現地で保存できないことから、埋蔵文化財所在範囲6,411m<sup>2</sup>のうち1,720m<sup>2</sup>（四方荒屋遺跡（上層1面）1,060m<sup>2</sup>、四方背戸割遺跡（上下層2面）660m<sup>2</sup>）については、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。それ以外の埋蔵文化財所在範囲4,691m<sup>2</sup>は現状保存とした。

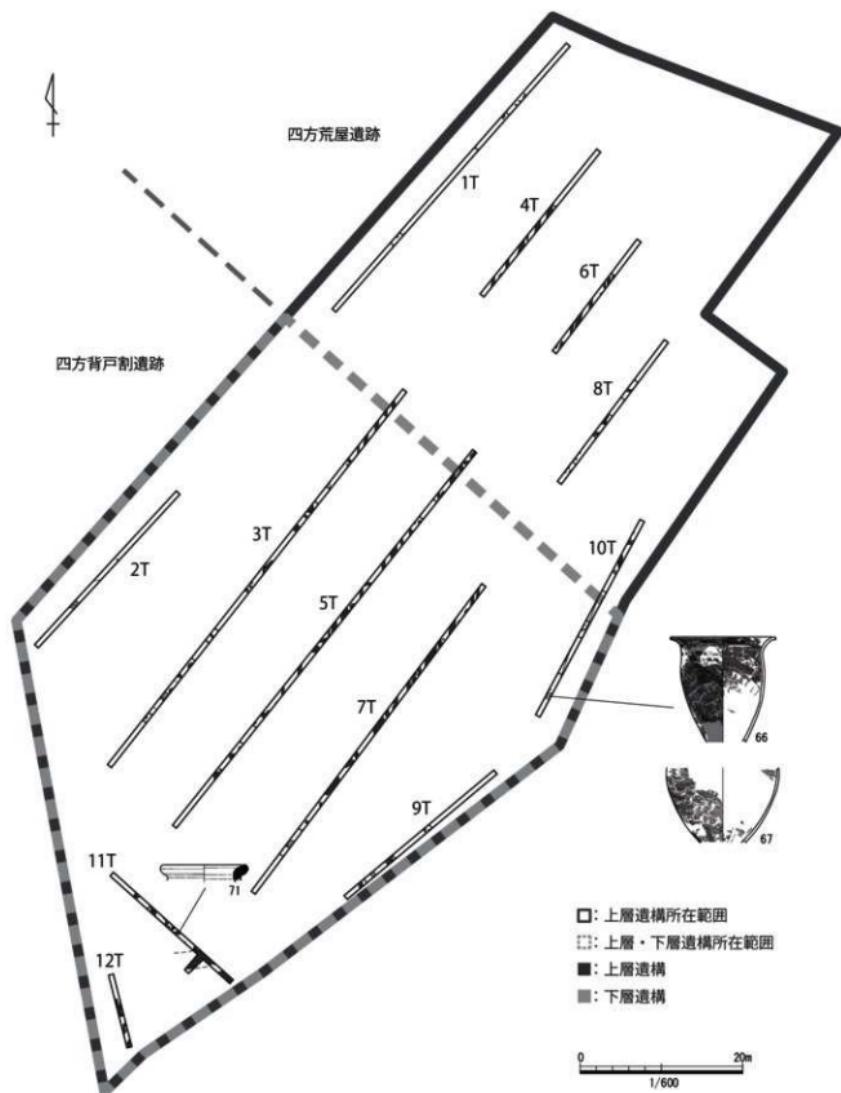
文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、施主から令和4年8月5日付けで富山市教委へ提出され、富山市教委の副申付けて同年8月18日付け埋文34号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、富山市教委から同年10月18日に富山県教育委員会へ提出した。四方荒屋遺跡は11月18日、四方背戸割遺跡は11月21日に調査を完了し、現地を引き渡した。

(堀内)

### 第4節 出土品整理の経過

出土品整理は、現地調査終了後の令和4年11月22日から有限会社毛野考古学研究所富山支所で実施した。放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果は第4章に掲載した。併行して遺物写真撮影、原稿作成を行い、令和5年9月30日に本書を刊行した。

(常深)



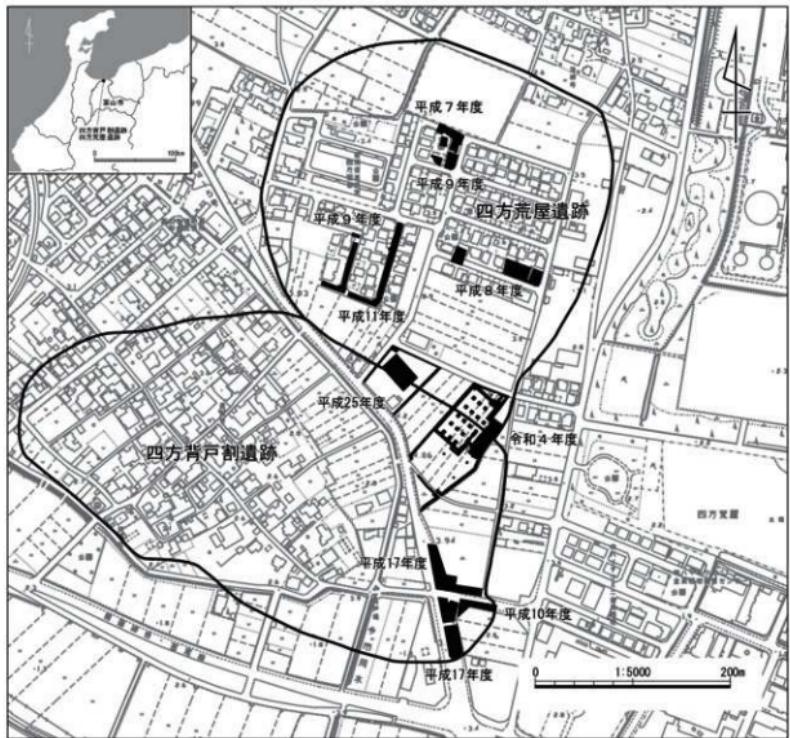
第1図 試掘調査トレンチ位置図

## 第5節 周辺の調査状況（第2図）

四方荒屋遺跡では、平成7～11年に分譲宅地造成工事に伴う発掘調査を7次にわたって実施した（富山市教委ほか 1999、富山市教委 2000・2008a）。北地区では、大型建物と倉庫・井戸を配する短冊形の地割を呈する14世紀以降の屋敷地を検出し、かわらけ・珠洲・刀子などが出土した。西地区南部では、江戸時代の東西方向の畝跡（B群）を検出した。東地区では、古墳時代前期の土坑、平安時代の土坑、江戸時代の南北方向の畝跡（A群）を検出し、古式土師器・須恵器などが出土した。

四方背戸割遺跡では、平成10年と平成17年に国道415号線道路改築工事に伴う発掘調査を実施した。弥生時代中期～古墳時代初頭の平地式建物、溝、土坑、ピット、焼土、中世の掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出し、弥生時代中期～古墳時代初頭の弥生土器・古式土師器、中世の土師器・珠洲・土鍤・鉄滓が出土した。1586年天正地震と1858年飛越地震に伴う噴砂跡も検出された（富山市教委 1999a・2006a）。

平成25年、四方背戸割遺跡北部（旧四方荒屋遺跡南部）において富山北消防署和合出張所新築工事に伴う発掘調査を実施した。上層で江戸時代の畝跡（A群・B群）、下層で弥生時代中期～後期の



第2図 四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡調査区位置図

平地式建物、溝、土坑を検出した。遺物は弥生時代中期～後期の弥生土器、中世の珠洲、近世の越中瀬戸などが出土した。弥生土器の中には、後期前半の天王山式土器があり、東北や下越地域など北日本地域との交流を示す資料と考えられている。863年貞觀地震に伴う噴砂跡も検出された（富山市教委 2014）。

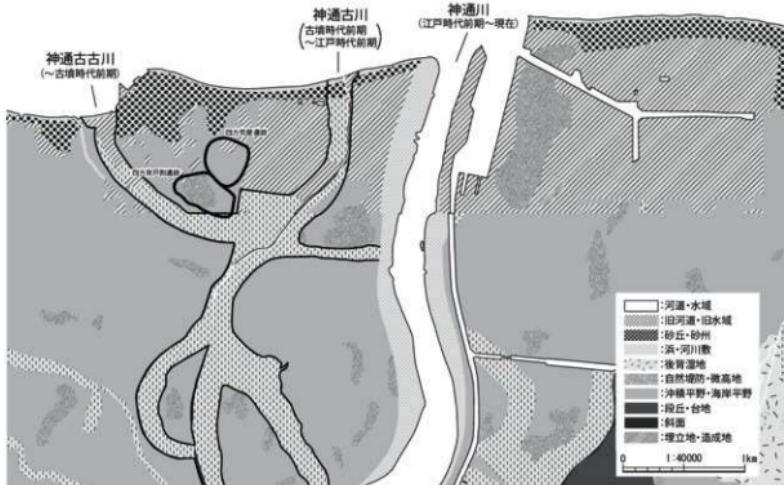
(堀内)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

両遺跡は、富山市北部に位置し、富山市街地から北へ約7kmの富山市四方荒屋地内に所在する。現在の神通川から西へ約1.5～1.6km、海岸汀線から約0.6～1.0kmの神通川左岸の海岸砂丘内側の低湿地上に立地する。標高は2.5～3mである。

神通川河口は、弥生時代から江戸時代にかけて洪水によりその位置が変わっていたことが分かっている（第3図）。弥生時代後期には現在の神通川から西へ約2.8～2.9kmの富山市打出地内にあり（富山市教委 2004）、打出を通る流路は神通古古川と呼ばれている。小黒智久の研究では、4世紀中頃（古墳時代前期）の大規模洪水で神通古古川の流路が変わり、古古川跡は河跡湖になったとされる（小黒 2015）。延徳3（1491）年に書かれた冷泉為広の『越後下向日記』の中で、「…ウチデ里 シバクサ ヨカタ里 イワセ渡、大河あり、里カミイワセ ナカエノ木里…」と記述がある（小葉田 1986）。日記が書かれた室町時代後期には西岩瀬の東に神通川河口であったことが分かる。古墳時代前期以降室町時代までに流路が変わり、西岩瀬の東を通り、海へ注ぎ込んでいたと考えられる。その川は現在細い川となっていて、神通古古川と呼ばれている。『越中国四郡絵図』（正保年間から万治年間



第3図 神通川の河口変遷図

(1644～1660)、小矢部ふるさと歴史館蔵)には、神通古川が本流だった頃の神通川が描かれており、江戸時代前期まで西岩瀬の東を流れていたことが分かる。その後、『越中記』によれば万治元年(1658)の大洪水で東岩瀬の西側に流れができ、その後寛文8～9年(1668～69)の洪水以後は現在の河口である東岩瀬の西側が本流となったとされる。

## 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、旧石器時代から近世に各時代の遺跡が所在する(第4図)。

旧石器時代は、北代台地の北西山裾にある小竹貝塚ではナイフ形石器が出土している。北代台地上にある北代遺跡では、ナイフ形石器と斧形石器が出土している(西井・藤田1976)。

縄文時代前期には、縄文海進で広がった旧放生津潟の湖畔に貝塚を伴う集落が営まれた。小竹貝塚では、前期中葉～末葉に集落が形成された。集落に隣接する貝塚内に墓域が造られ、縄文時代前期では全国最多の人骨が発見された(富山県財团2014)。小竹貝塚の東約750mに、前期後葉の「蜆ヶ森式土器」の標識遺跡である蜆ヶ森貝塚もある。現在の神通川底から掘り出された土砂から前期の土器が採集されており、神通川河口付近にも集落が存在した可能性が示唆されている(古川2005)。

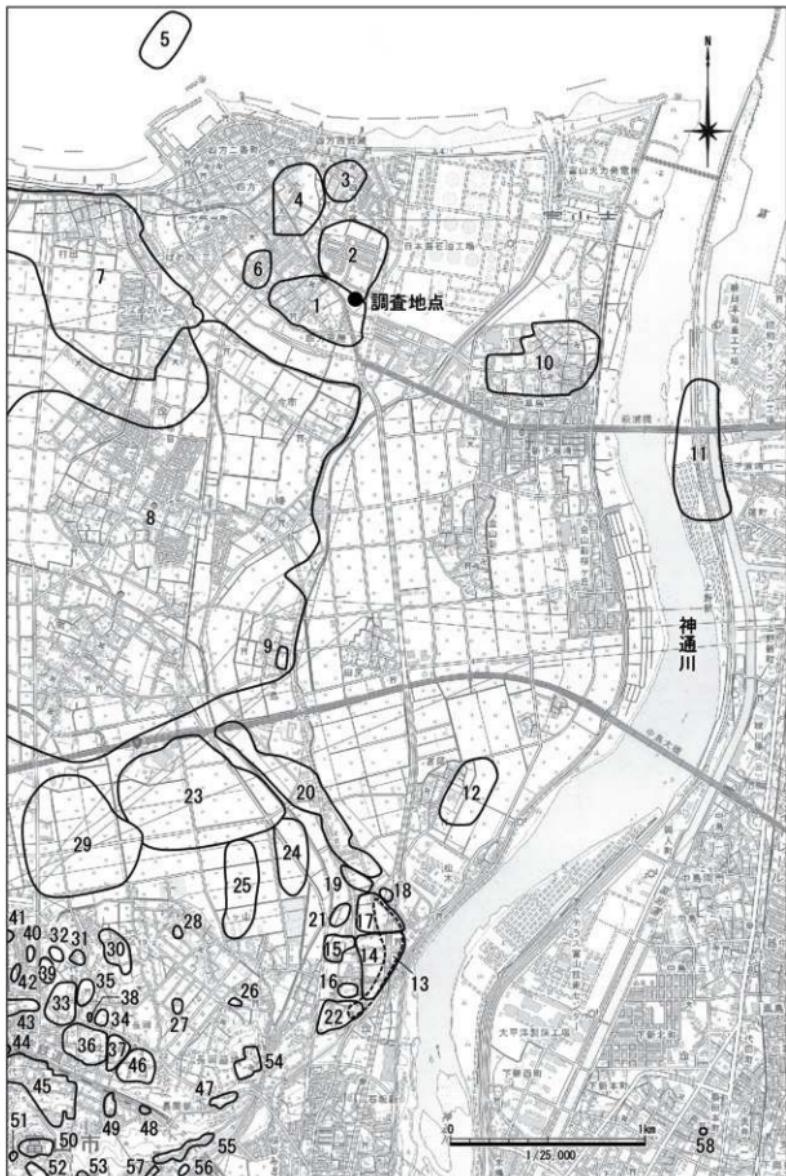
縄文時代中期に入ると、北代台地上に集落が形成され、代表的な遺跡が国史跡北代遺跡である。高床建物を中心に約70棟以上の竪穴住居が取り巻く集落形態を取る(富山市教委1998)。北代加茂下III遺跡では、柱列が二重に巡る14本以上の柱を持つ特異な建物を確認した(堀沢1996・1997)。縄文時代後・晩期にも、北代台地上には北代遺跡や長岡林遺跡などで集落が営まれる。長岡八町遺跡では、谷地形から後期～晩期の大量の縄文土器とともに大型の土偶、石棒、石刀、御物石器など祭祀関係遺物が出土した(富山市教委・環境事業団2003)。

弥生時代前期から中期にかけては、神通古川左岸の打出遺跡などが知られるが、散発的に確認される程度である。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、遺跡数が増加し、神通古川流域では、集落が営まれる。右岸に四方背戸割遺跡(戸水B式～古府クルビ式)、永代割遺跡(猫橋式～古府クルビ式)など、左岸に打出遺跡(法仏式～高畠式)、今市遺跡(月影式)などの集落遺跡がある。打出遺跡では、畿内との関係の深い三連壇や県内最多の鉄器が出土し、神通川下流域の拠点的集落であったと推測した(富山市教委2006b)。呉羽丘陵上には多数の墳墓や古墳が造られた。呉羽丘陵北端部には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳等28基を発掘し、「百塚古墳群」の存在を確認した(富山市教委2009・2012)。百塚古墳群の南西約1kmには、古墳時代初期の造営とされる杉坂古墳群がある。さらに杉坂古墳群の南南西約0.4kmには、古墳時代前期の円墳と考えられる番神山古墳が発見された(富山市教委2020)。

古墳時代後期には、番神山横穴墓群や金屋陣ノ穴横穴墓群などの群集墳が造られる。番神山横穴墓群では、昭和期に発見された15基に加え9基が新たに発見された。B9号墓からは、馬具4点(大型矩形立環状鏡板付轡1、銚子2、飾金具1)が出土し、上位階級の被葬者の存在が示唆された(富山市教委2022)。百塚遺跡ではこの時期にも円墳が造られ、円墳の周溝内埋葬施設に馬のハミが副葬され、他地域に先んじて馬を所有した有力者がいたと考えられる(富山市教委2012)。

古代には、呉羽丘陵北西部に古代射水郡「寒江郷」の存在が推測されている(根津2006)。北代遺跡・百塚住吉D遺跡・今市遺跡などがその開墾集落と考えられる。長岡林遺跡では、綠釉陶器、灰釉陶器に加え、瓦塔などの仏教遺物も出土し、古代「寒江郷」の中心的な集落と考えられる(富山市教委1987)。百塚住吉D遺跡では、7世紀後半～9世紀の竪穴建物、掘立柱建物、大型土坑など古代「寒



第4図 周辺の遺跡分布図

江郷」の集落の遺構を検出した。特に2基の大型土坑は馬小屋と推測されている（富山県農林センター・富山市教委2012）。八ヶ山A遺跡では、8世紀後半～9世紀の区画溝、井戸、土坑などを検出した。区画溝は、周辺の百塚住吉D遺跡や八町II遺跡の遺構と同一方向であることから、周辺と同じ地割となっていたと考えられる（富山市教委2015）。平安時代の道路跡が、打出遺跡（北西～南東方向）、今市遺跡（南西～北東方向）で検出し、両遺跡の間で交わると推定した（富山市教委2013b、県財团2015）。

中世になると、神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩漬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的性格が考えられている（中世岩漬湊調査研究グループ2004）。八町II遺跡では、鎌倉時代～室町時代の集落を確認し、区画溝や多数の井戸が検出し、千鳥紋を施した漆器なども出土することから京都下鴨神社領「寒江荘」の中核的な集落と考えられている（富山市教委2008b）。越中守護代神保氏の被官であった国人寺嶋氏の出自の地と推測されている今市遺跡内の寺島地区において、薬研堀や土橋、犬走りなどの館跡とされる遺構を確認し、鎌倉時代にはこの地に有力者の館が存在することが明らかとなった（富山市教委2011）。

千原崎遺跡では、17世紀前半（1期）、17世紀後半～18世紀前半（2期）の江戸時代の集落が確認された。2期の集落は寛文8～9年の洪水以後「千原崎の渡し」が置かれたことに伴い、港町宿場的な性格に変化した集落と考えられる（富山市教委1996・1999b）。八ヶ山地内に富山藩主前田家墓所（長岡御廟所）が造営される。加賀藩より富山藩10万石を与えられた前田利次は、立藩の際に百塚の地に新城を造ることを願い出て許可をされ、「百塚侍従」と呼ばれた。しかし、百塚築城は財政的に叶わず、二代正甫が亡父の念願であった百塚城予定地近くに利次を葬り、以後この場所が富山藩歴代藩主の墓所になった（古川・野垣・小林・蓮沼2010）。

(堀内)

#### 遺跡名一覧（第4図）

- 1:四方背戸割遺跡 2:四方荒屋遺跡 3:四方北窪遺跡 4:四方西野割遺跡 5:四方沖海底遺跡
- 6:江代割遺跡 7:打出遺跡 8:今市遺跡 9:寺島館跡 10:草島遺跡 11:千原崎遺跡 12:宮尾遺跡
- 13:百塚古墳群 14:百塚遺跡 15:百塚B遺跡 16:百塚鍵割遺跡 17:百塚住吉C遺跡 18:百塚住吉B遺跡
- 19:百塚住吉C遺跡 20:百塚住吉D遺跡 21:百塚住吉E遺跡 22:八ヶ山遺跡 23:八ヶ山A遺跡
- 24:八ヶ山B遺跡 25:八ヶ山C遺跡 26:八ヶ山林蔭跡 27:八町C遺跡 28:八町D遺跡 29:八町II遺跡
- 30:長岡八町遺跡 31:北代加茂下I遺跡 32:北代加茂下II遺跡 33:北代加茂下III遺跡
- 34:北代加茂下IV遺跡 35:北代加茂神社遺跡 36:北代遺跡 37:北代東遺跡 38:北代大畠II遺跡
- 39:北代中谷遺跡 40:北代中谷II遺跡 41:北代村巻I遺跡 42:北代村巻IV遺跡 43:北代村巻V遺跡
- 44:北代シャクドジ遺跡 45:吳羽富田町遺跡 46:長岡杉林遺跡 47:長岡新遺跡 48:北代一万歩遺跡
- 49:北代南田湖遺跡 50:茶屋町遺跡 51:北代西山遺跡 52:北代西山II遺跡 53:北代平野遺跡
- 54:富山藩主前田家墓所（長岡御廟所） 55:杉坂古墳群 56:長慶寺古墳 57:五百羅漢
- 58:奥田神社遺跡

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

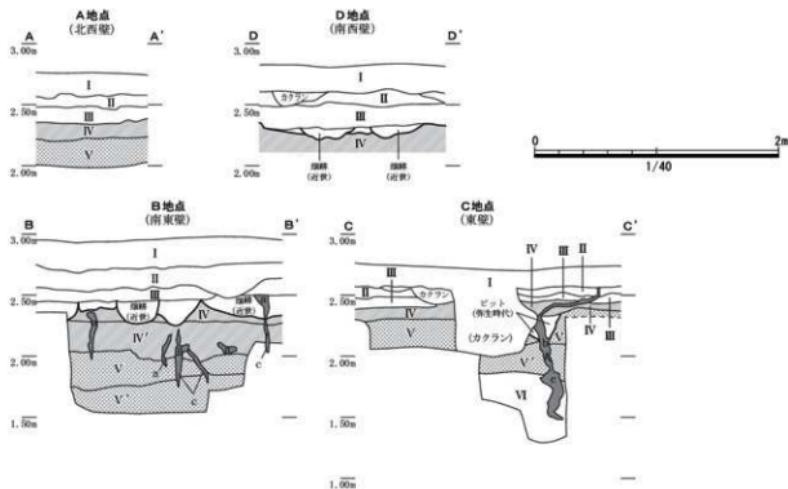
表土掘削は重機を使用し、上層遺構確認面(IV層)の上面まで掘削した。さらに四方背戸割遺跡ではIV層を重機で掘削し、V層上面を下層遺構確認面とした。調査区の名称は、建物基礎など小規模な調査区のみK1～K17区と呼称した(第7図)。グリッドはX=83,480、Y=3060を基点に5m方眼で設定し、東へA・B・C…、南へ1・2・3…と名称を付した(第6図)。遺構番号は、四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の区別無く、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「SD01」・「SK95」のように呼称した。四方背戸割遺跡の下層遺構については4桁の番号を使用し、「SK1001」・「SX1176」のように呼称した。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板で行い、縮尺は1/20とした。遺構の写真は、デジタル1眼レフカメラ(NikonD850)を使用し、RAWデータ撮影をした。遺跡の全景写真はラジコンヘリによる空中写真とし、デジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark IV及びSONY ILCE-7RM2)にて撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、遺跡記号・遺構名・遺物番号・取上日を「YA SK95 No.01 220915」のように注記した。遺跡記号は四方背戸割遺跡が「YKS」、四方荒屋遺跡が「YA」である。遺物の写真撮影はデジタル1眼レフカメラ(NikonD850)を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成とともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式で入稿した。

### 第2節 層序

調査地点の標高は2.8m前後で概ね平坦である。基本層序はA～D地点の4ヶ所で確認した(第5,6図)。

- I層：10YR6/1 暗褐色土 表土(耕作土)。シルト質で、II層の小塊を含む。鉄分が沈着する。
- II層：10YR2/1 黒色土 旧耕作土。灰色土の小塊を多く含む。一部ではI層に鋏き込まれ、消失する。
- III層：10YR3/1 黒褐色土 旧耕作土。IV層の小塊を含む。平成25年度調査(四方荒屋遺跡)のV層(近世の遺物包含層)に相当するが、今回の調査範囲では遺物は出土しなかった。III層より新しい遺構はSD30・178、地震痕がある(第6図)。
- IV層：2.5Y6/4 ぶい黄色土 上層遺構の確認面であり、古代～近世まで遺構を検出した。シルト質～細砂質で、鉄分が沈着する。層厚15～20cm程度。IV層上面の標高は、四方背戸割遺跡南側が2.5～2.6mで小高く、その他は2.3～2.4mでほぼ平坦である。平成25年度調査(四方荒屋遺跡)のVI層(弥生時代の遺物包含層)に相当するが、今回の調査範囲では弥生土器は出土しなかった。
- IV'層：2.5Y4/2 暗灰黄色土 B地点で確認された。IV層より暗色となり、地震痕(地割れ)の影響で部分的にIV層が混入する。下層遺構面における低地に堆積した層と考えられる。
- V層：2.5Y7/4 浅黄色土 下層遺構(四方背戸割遺跡)の確認面であり、弥生時代の土坑、ピットなどを検出した。シルト質である。V層上面の標高は、四方背戸割遺跡の南側が2.4mで高く、北東に向かって緩やかに下がりながら、東側は2.0mで一段低くなる。
- V'層：V層の下部。地震痕(噴砂)の影響で下からVI層が噴出し、VI層が混入する層。噴出したVI層の周囲に鉄分が沈着する。
- VI層：2.5Y8/1 灰白色土 シルト質～細砂質で、鉄分が沈着する。地震痕の噴砂はVI層より下から噴出している。



第5図 基本層序

### 第3節 遺構

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡とともにIV層上面で遺構を確認した(上層、第7～13図)。遺構は土坑、溝、柵、ピット、烟跡、地震痕があり、時期は平安時代から近世に及ぶ。四方背戸割遺跡では、V層上面を遺構確認面とする調査を行い(下層、第23～26図)、弥生時代の土坑、溝、ピットを確認した。

#### 1 上層遺構(四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡)

上層では土坑10基、溝16条、柵1条、畑跡、ピット多数を確認した。

##### (1) 土坑

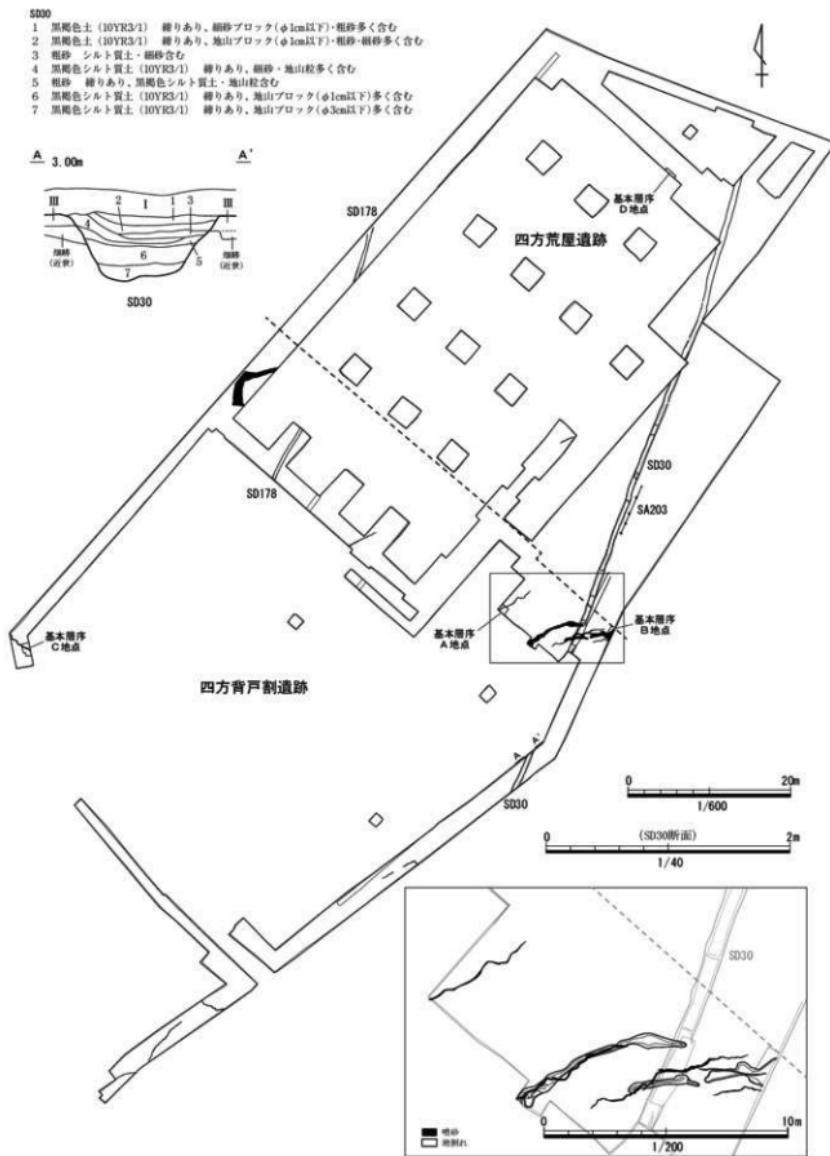
土坑は調査区内に点在し、SK94・95・125が平安時代、SK40・43・130・163が近世以降、SK96・131・165が時期不明である。SK40・130・163は形状・方位・覆土に共通性があり、同一時期の土坑とみられる。

**SK40**(第14図) 四方荒屋遺跡のS9・S10グリッドに位置する。東西1.2m以上、南北1.1m以上の隅丸長方形で、長軸はN-79°-Eを示す。深さは52cm、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色土が堆積する。出土遺物はないが、II層より新しいことから近世畑跡より新しい。

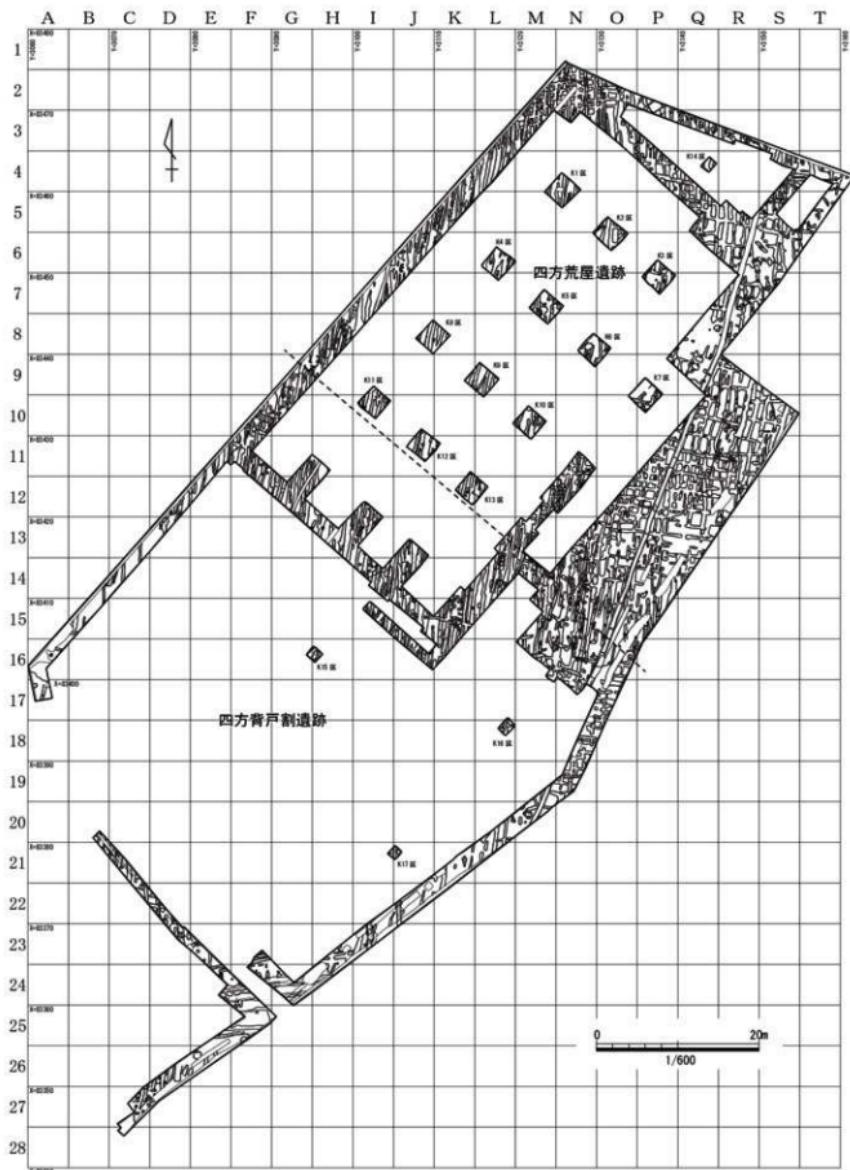
**SK43**(第14図) 四方背戸割遺跡のN19グリッドに位置する。東西1.4m以上、南北0.6m以上の不整形で、深さは48cmである。出土遺物はないが、切り合いで近世畑跡に後出する。

**SK94**(第14図、図版5) 四方荒屋遺跡のQ13-R13グリッドに位置する。東西1.4m以上、南北1.4m以上の台形状で、深さは10cmである。切り合いで近世畑跡より古い。土坑内の南寄りの地点で、赤彩を施した土師器壇・皿(2~4)や土師器甕の破片がまとまって出土した。時期は平安時代である。

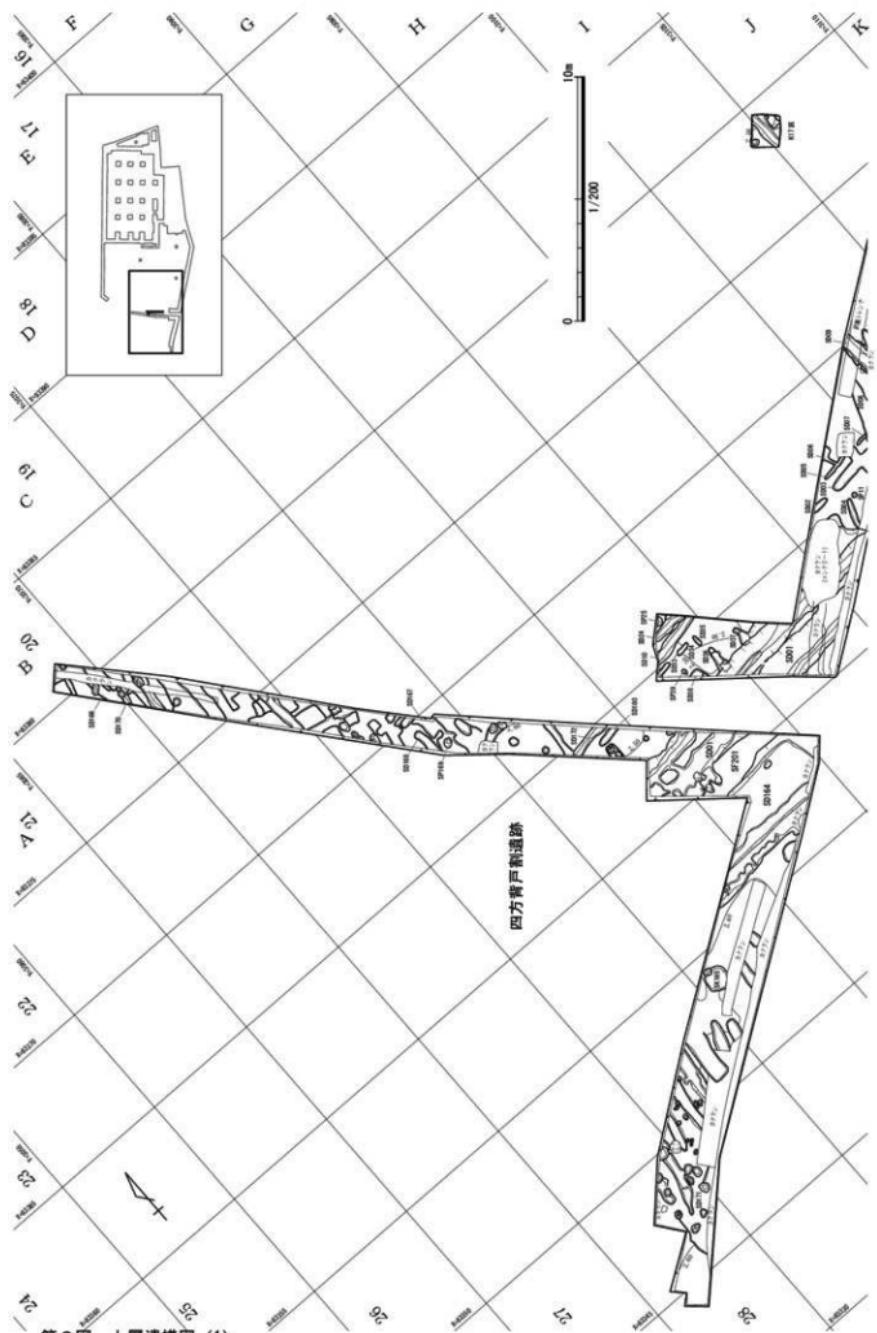
**SK95**(第14図、巻頭3・図版5) 四方荒屋遺跡のQ13グリッドに位置し、SK94の西に隣接する。南北0.54m以上、東西0.41mの隅丸長方形で、長軸はN-10°-Eを示す。深さは46cmである。切



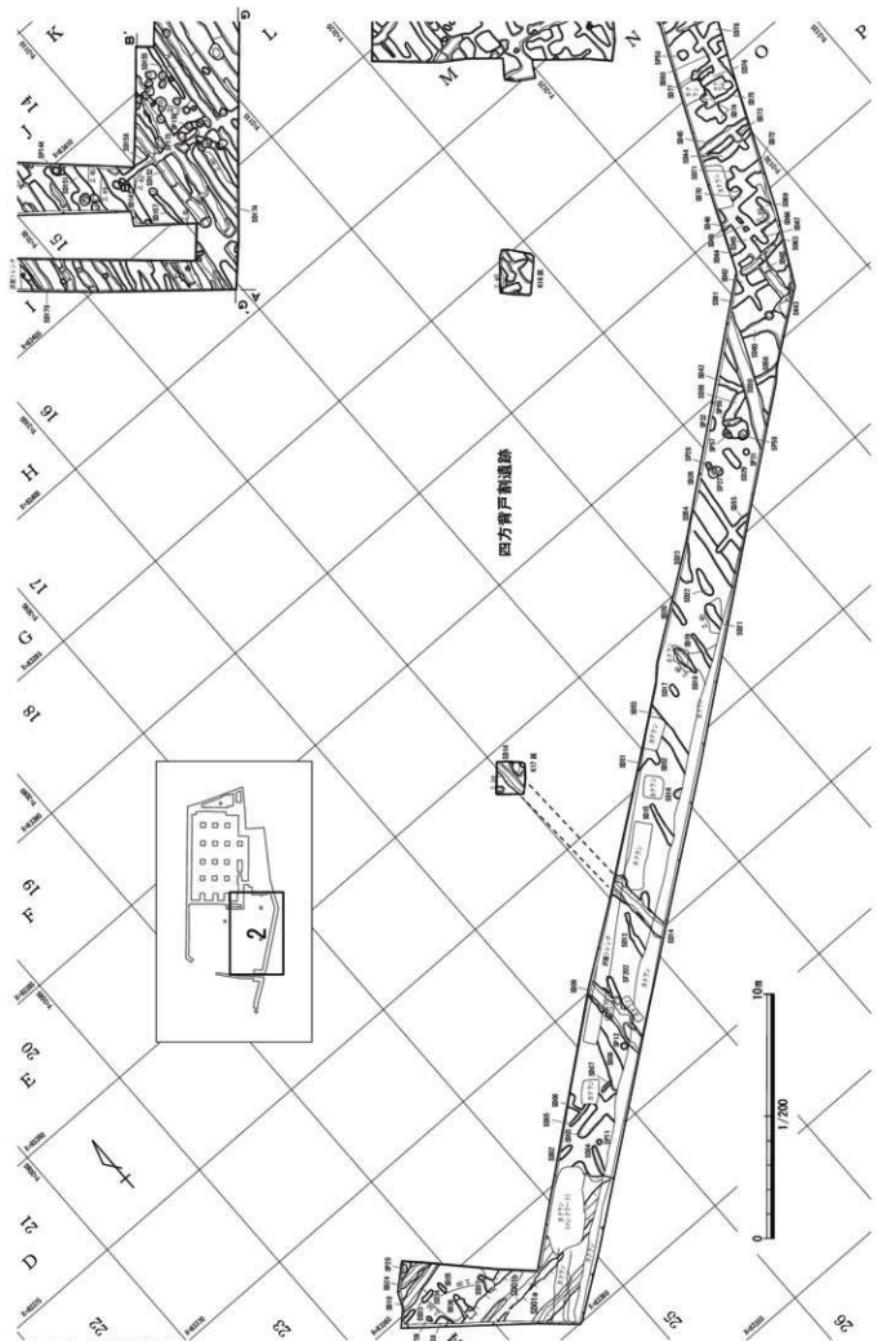
第6図 基本層序・地震痕・SD30・SA203位置図



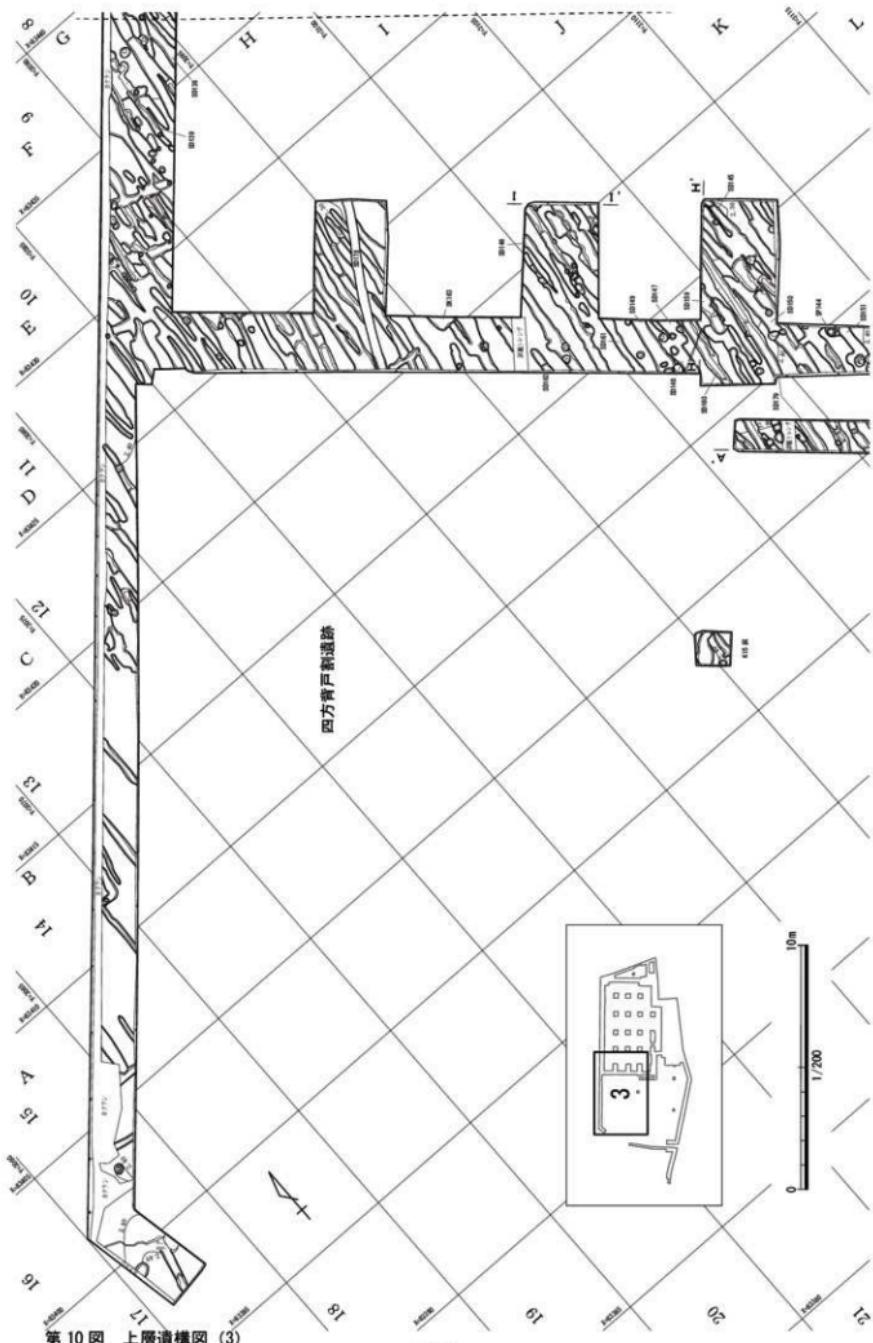
第7図 上層調査区全体図

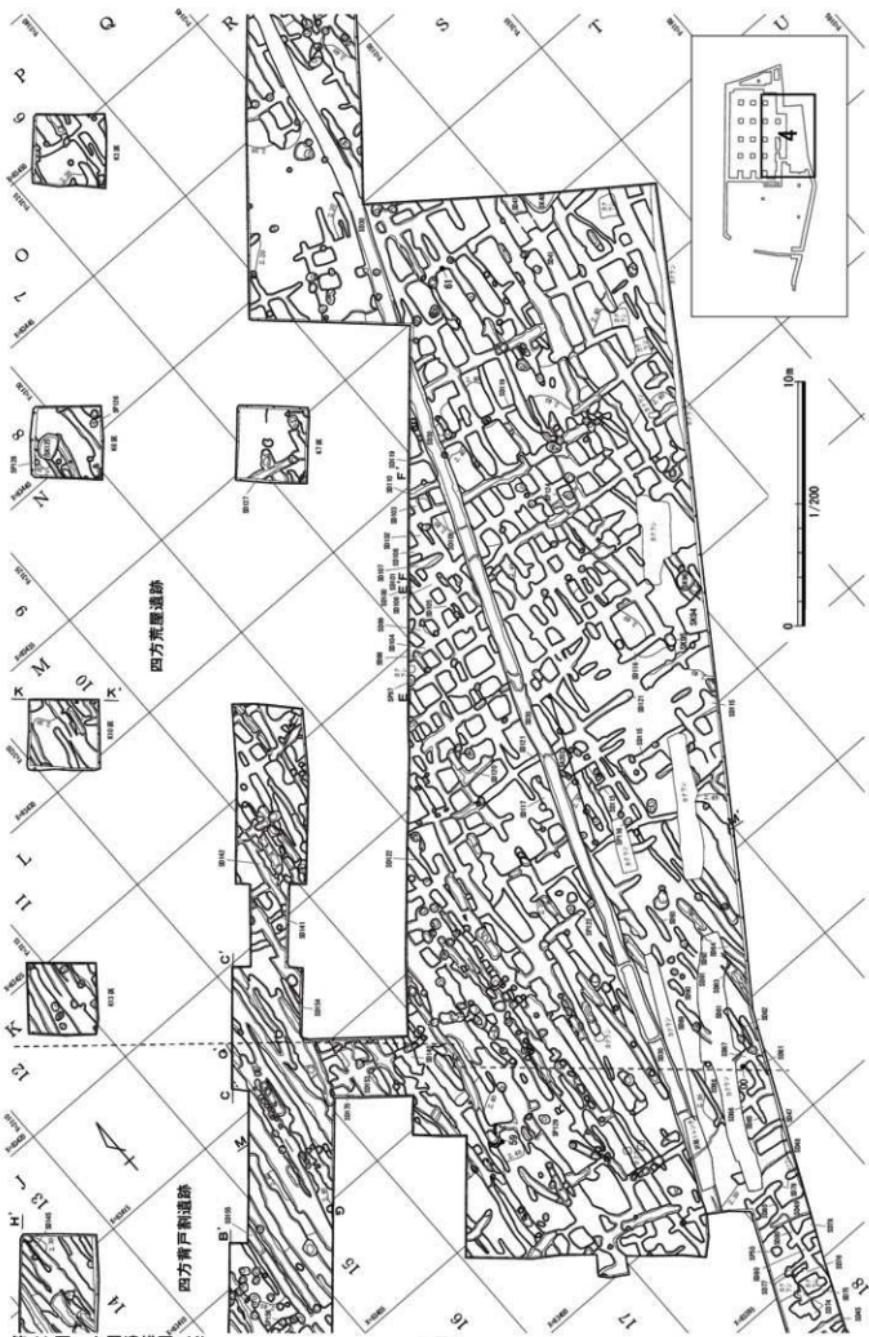


第8図 上層遺構図(1)

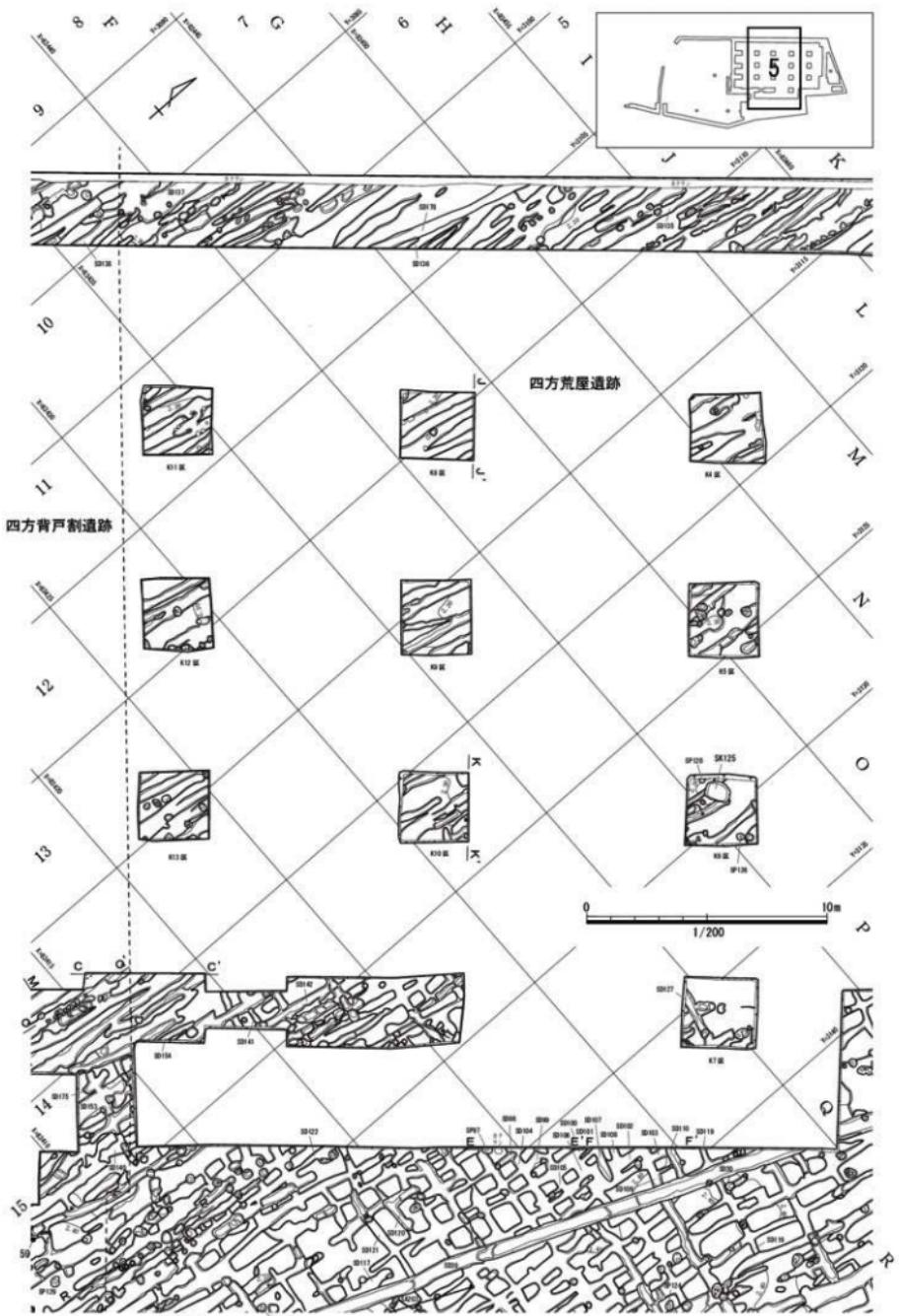


第9図 上層遺構図(2)

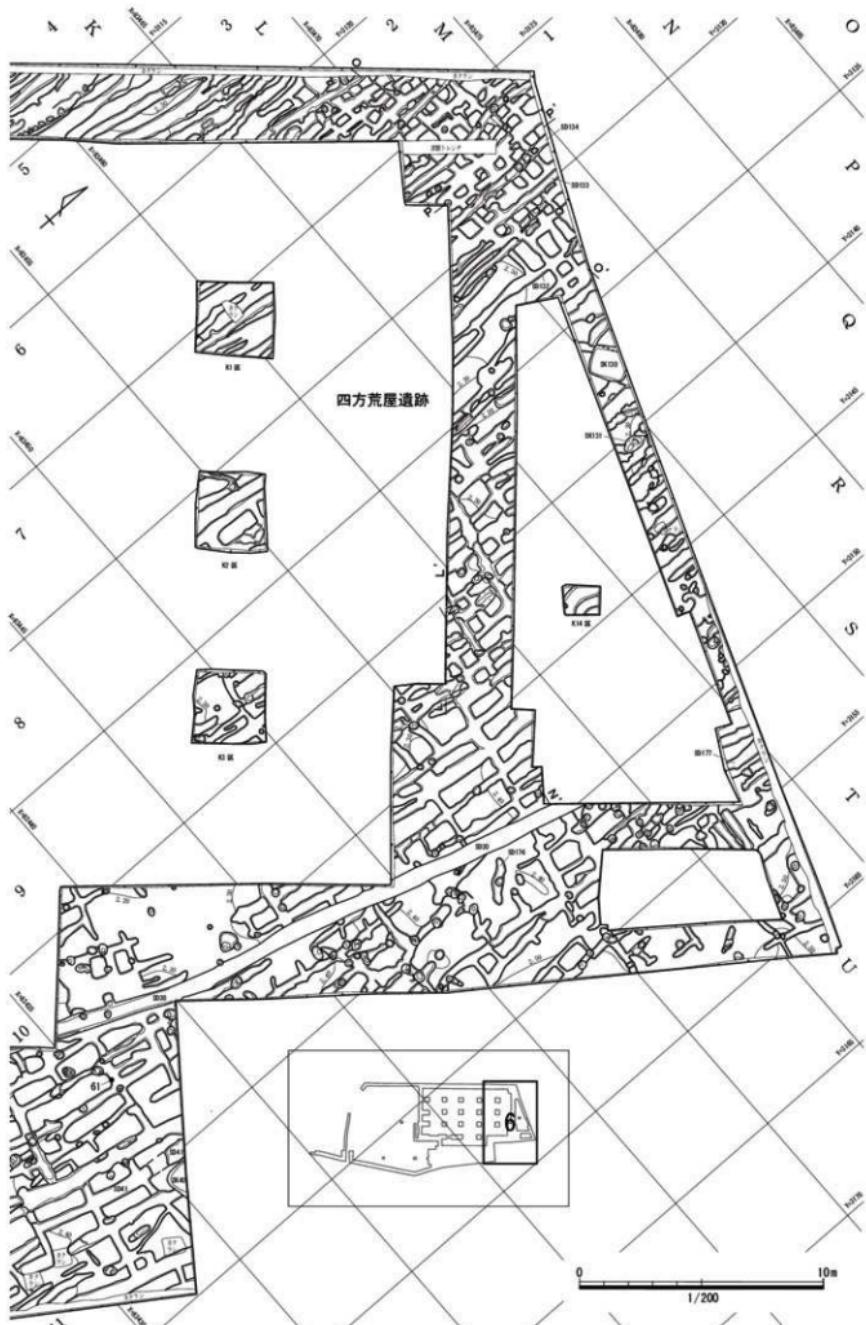




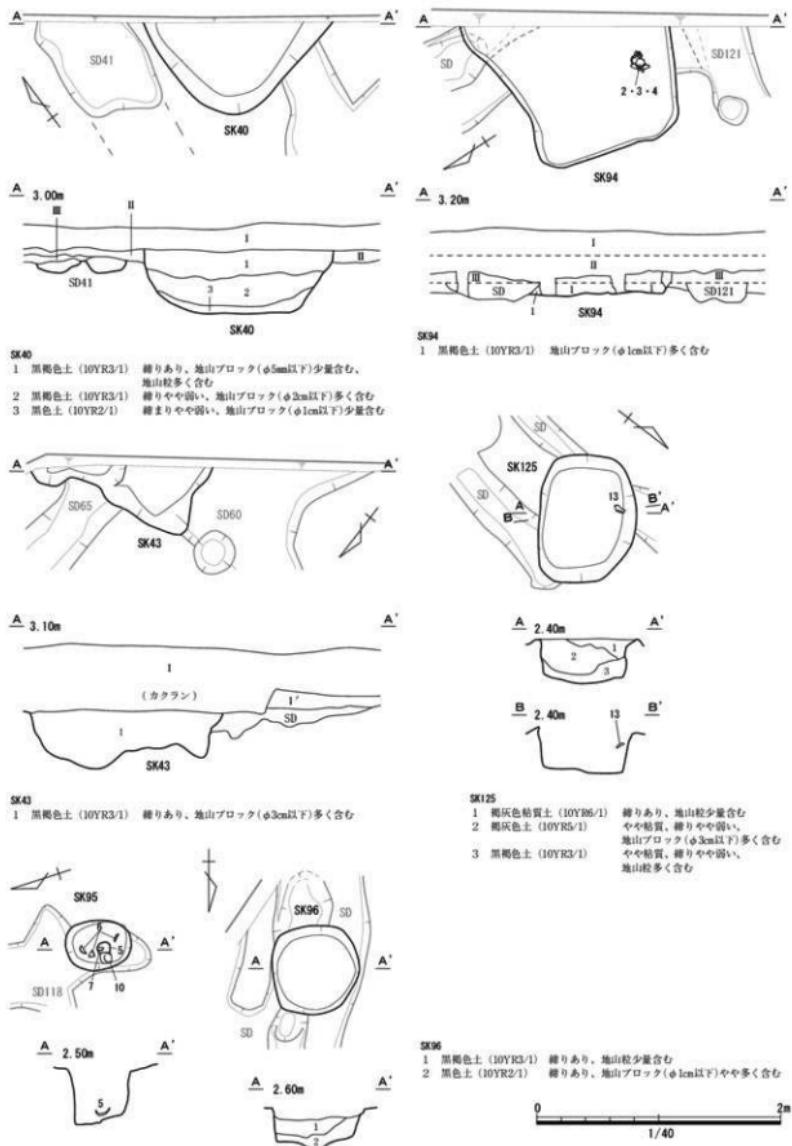
第11図 上層遺構図(4)



第 12 図 上層遺構図 (5)



第13図 上層遺構図 (6)



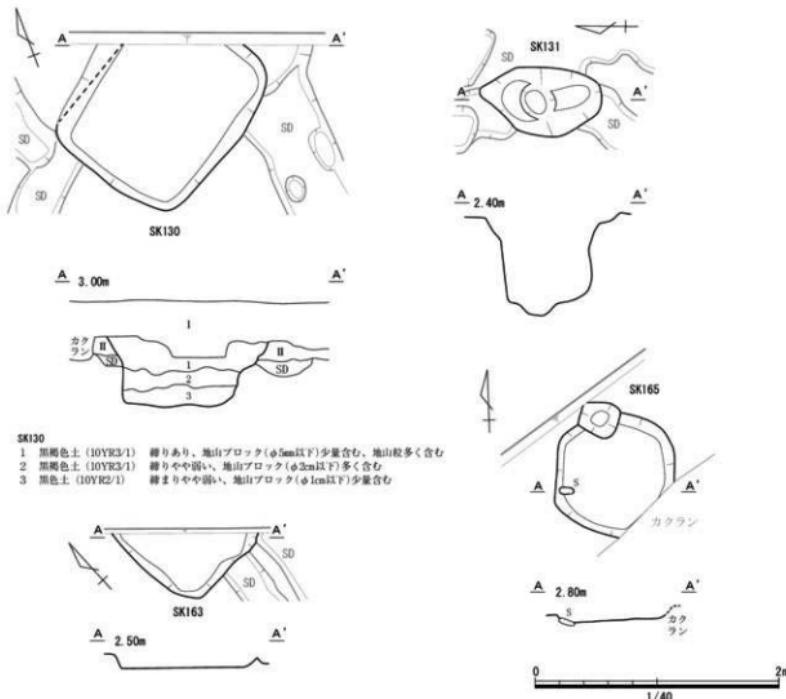
第14図 土坑遺構図 (1)

り合いにより近世畠跡に先行する。覆土に炭化物が多く含まれたことから、放射性炭素年代測定を実施し、calAD678～calAD873の年代が示された（第4章）。土坑内からは土師器塊がまとまって出土した（5～10）。土坑中央の底面付近には灯明皿として使用された5が正位で出土した。10は覆土上層、7は覆土中層から出土し、6は覆土上層と中層で接合した。このほかに土師器甕（11）、鉄製品（12）が出土した。土坑の時期は平安時代である。

**SK96**（第14図）四方荒屋遺跡のQ13・R13グリッドに位置し、SK94の北に隣接する。東西0.70m、南北0.73mの隅丸方形だが、やや不整形である。深さは34cmである。切り合いにより近世畠跡に先行するが、出土遺物がなく、時期は不明である。

**SK125**（第14図、巻頭3・図版5）四方荒屋遺跡のN8グリッド、K6区内に位置する。長軸1.04m、短軸0.78mの隅丸長方形で、長軸はN-52°-Eを示す。深さは37cmである。地山塊を多く含む土で埋没した後の覆土上層（1層）から白磁碗（13）が出土した。近世畠跡と重複するが、新旧は判別できなかった。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。

**SK130**（第15図、図版5）四方荒屋遺跡のP2・P3グリッドに位置する。東西1.54m、南北1.23mの隅丸長方形で、長軸はN-58°-Eを示す。深さは55cm、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色



第15図 土坑遺構図（2）

土が堆積する。出土遺物はない。切り合いにより近世畑跡に後出する。

**SK131** (第15図、図版5) 四方荒屋遺跡のQ3グリッドに位置する。南北1.00m、東西0.57mの不整梢円形で、長軸はN-1°-Wを示す。中央がピット状に深くなり、深さは83cmである。出土遺物はない。近世畑跡と重複するが、新旧は判別できなかった。時期は不明である。

**SK163** (第15図) 四方背戸割遺跡のH12グリッドに位置する。南北0.88m以上、東西0.77m以上の隅丸長方形と推定され、長軸はN-88°-Eを示す。深さは12cm、黒色土の上に地山塊を多く含む黒褐色土が堆積する。土器師塙(27)が出土したが、切り合いにより近世畑跡に後出する。

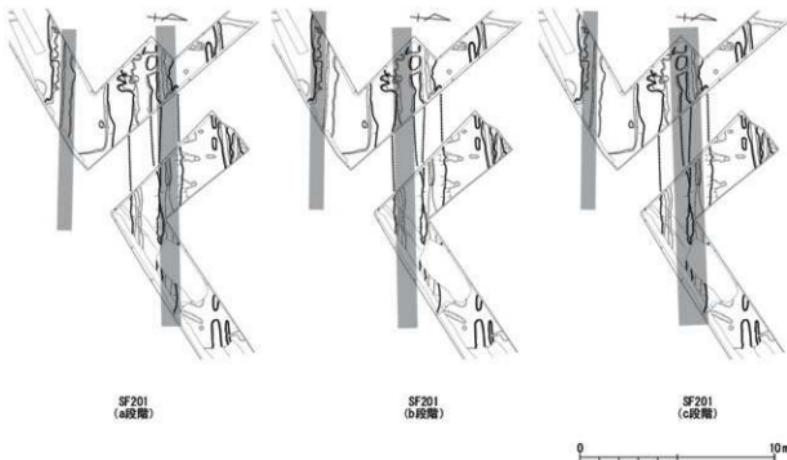
**SK165** (第15図) 四方背戸割遺跡のE26グリッドに位置する。直径0.95mの不整円形である。深さは10cmである。弥生土器片数点と棒状礫が出土したが、時期は不明である。

## (2) 溝・道路跡

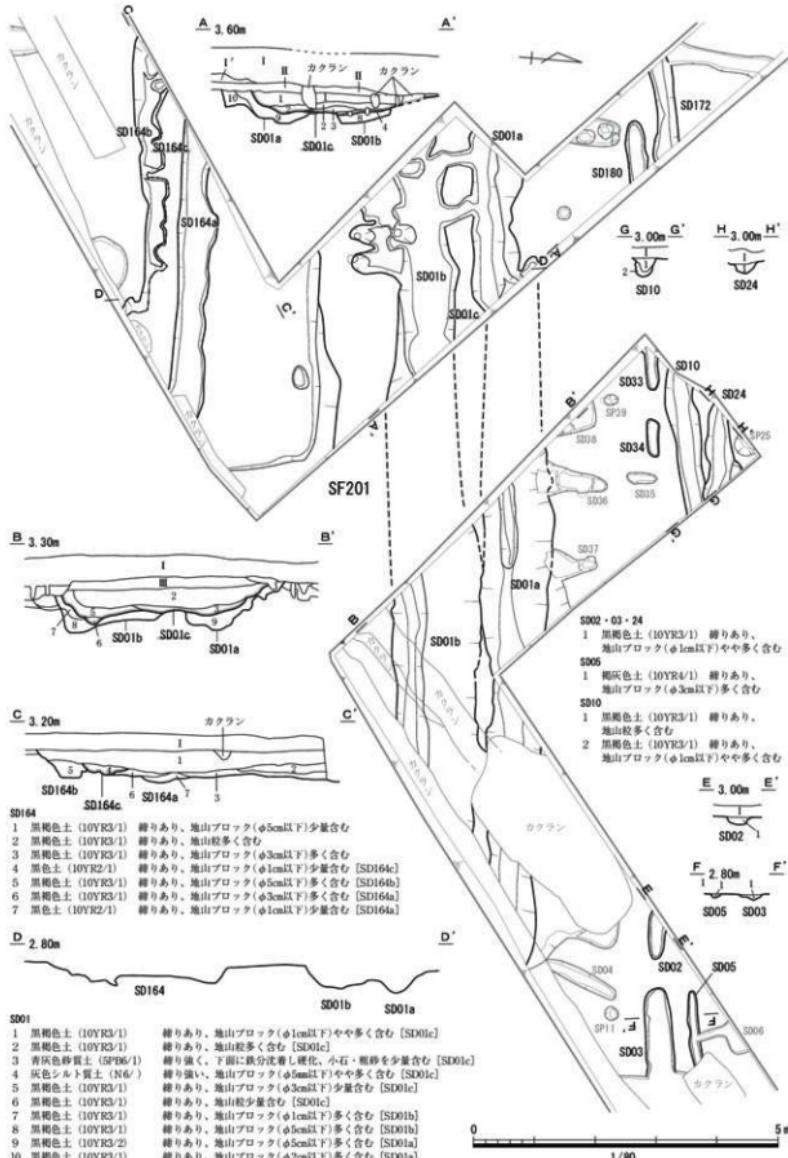
畑跡の歓溝を除き、16条の溝を検出した。SD01・164は他の溝に比べ規模が大きく、東西に並走する溝である。この北側にSD02・03・05・10・24・33・34・172・180の小溝が同様に並走する。これらが道路跡になる可能性から、SF201と総称した。またSF201の東側には南北に並走するSD09・14があり、同じく道路跡の可能性がありSF202と称した。

**SF201** (第16・17図、図版7) 四方背戸割遺跡F24・F25・G24グリッド付近に位置する。SD01を北側溝、SD164を南側溝とする道路跡の可能性がある。両側溝とともに掘り直しによってa～cの三段階があり、それぞれが対応すると考えられる。

SD01は方位N-83°-Eを示す。壁断面A・Bから規模を推定すると、a段階は上幅1.6m、下幅0.3m、最大深0.8mの薬研堀状である。b段階は上幅1.3m、下幅1.0m、最大深0.84mの断面逆台形で、部分的に底面南側が溝状に深くなる。c段階は上幅2.6m、下幅1.5m、深さ0.6mで、断面は幅の広い逆台形となる。底面標高はa段階が1.8～2.0m、b段階が1.7～2.1m、c段階が2.1mである。a・



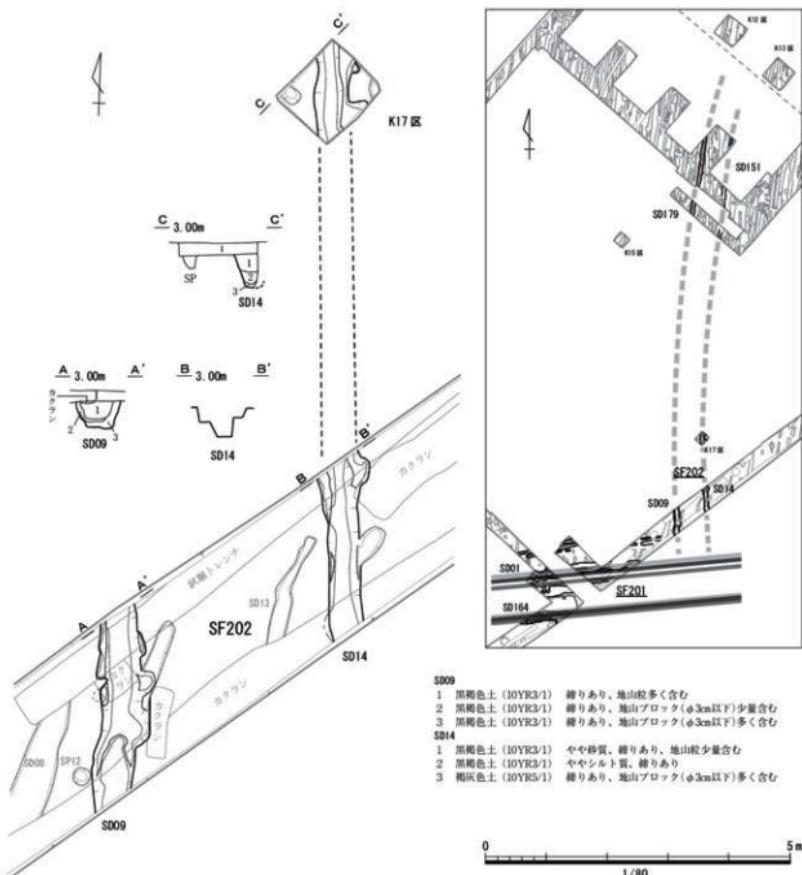
第16図 溝・道路跡 SF201 変遷図



第17図 満・道路跡 SF201 遺構図

b段階は地山塊を含む黒褐色土で埋め戻されているが、c段階は底面にシルト～粗砂が緩いレンズ状に堆積し、流水の痕跡を残す。遺物は弥生土器甕(49)、土器師甕(14)、珠洲甕(15)・擂鉢(16)、肥前皿ないし鉢(17)、土製品壺(18)・土錐(19)が出土している。

SD164は方位N~86°-Eを示す。SD01より規模は小さく、壁断面Cから推定すると、a段階は上幅0.7m、下幅0.4m、最大深0.52mの断面逆台形である。b段階は上幅0.6m、下幅0.2m、最大深0.46mの断面逆台形である。c段階は上幅0.6m、下幅0.3m、最大深0.4mの断面逆台形である。底面の標高はa段階が2.1~2.2m、b段階が2.2m、c段階が2.4mである。a段階上部とb段階は、地山塊を多



第18図 溝・道路跡SF202 遺構図

く含む黒褐色土で埋め戻される。c段階以後はSD164全体が浅い土坑状に削られ、本来の道路面は消失している(1~3層)。遺物は弥生土器壺・甕、中世土器器皿(22)、珠洲擂鉢(23)、陶器碗(24)が出土した。

SF201は出土遺物から中世の道路跡と考えられる。推定されるSD01・164間の路面幅はa段階が4.4m、b・c段階は3.8mである。北側溝のSD01は南側溝SD164より規模が大きく、c段階では流水の痕跡もあることから、用水路としての機能も想定される。またSD01の北側には約2mの距離を置いて小規模な溝が3条並走しており(SD10・24・33など)、SD01・164の三段階の変遷に連動する可能性もあるが、深さ5~10cmと浅く、詳細は明らかではない。試掘調査11号トレンチでは、この小規模な溝の延長線上に位置する東西溝から珠洲の甕(71)が出土している。

SF202(第18図、図版7) 四方背戸割遺跡のI23・J22グリッドに位置する。SD09・14を側溝とする道路跡の可能性がある。SD09は西側溝で方位はN-1°-Wを示す。規模は概ね上幅69cm、下幅33cm、深さ50cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は1.9~2.1mである。断面観察により、地山塊を多く含む土が堆積した後、上幅54cm、下幅26cm、深さ28cmの規模で掘り直しがあり、最終的に地山塊を含まない黒褐色土で埋没する。遺物は土器壺・甕、珠洲甕(20)が出土した。SD14は東側溝で方位はN-3°-Wを示す。規模は概ね上幅50cm、下幅23cm、深さ58cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は1.8~2.0mで、SD09より10cmほど低い。K17区で北への延伸が確認された。K17区の断面ではSD09と同様に地山塊を多く含む土が堆積した後、地山塊を含まない黒褐色土で埋没していたが、掘り直しの有無は判断できなかった。遺物は珠洲甕(21)が出土した。SD09・14間の路面幅は約3.16mである。SF202は方位を緩やかに東へ変えながら北へ延び、I14・15グリッドにおいて西側溝SD179が検出された。SD179は方位N-10°-Eを示す。規模は概ね上幅50cm、下幅28cm、深さ33cmで、断面形状は逆台形である。底面の標高は1.9~2.2mである。地山塊を多く含む土が堆積した後、上幅41cm、下幅21cm、深さ20cmの規模で掘り直しがあり、最終的に地山塊を含まない黒褐色土で埋没する。遺物は出土しなかった。東側溝の北側延長はSD09・14と路面幅が同一と仮定するとSD151となる可能性があるが、SD151は深さ10cm以下で規模が小さく、確定できない。SF202は北側の延伸が不明瞭となるが、中世の道路跡と考えられる。

SD30・178(第6図) SD30・178は近代~現代の溝で、付け替え前の用水路の跡と考えられる。SD30は概ね幅65cm、深さ30cmの規模で、直線的に延びる。北東端は検出されなかつた。黒色土や地山塊、細砂などが互層になつて堆積する。遺物は弥生土器甕、土器壺(28)、須恵器壺・甕、越中瀬戸皿(33)が出土した。SD178は概ね幅45cm、深さ20cmでSD30と同様の覆土である。

### (3) 柵跡

SA203(第6図) 四方荒屋遺跡P13・P14グリッドに位置する。5基のピットがSD30と60cmほど距離を置いて並列している。方位はN-24°-Eを示す。径25cm、深さ10~23cmのピットである。出土遺物はないが、並列する位置関係からSD30と同時期の柵跡と考えられる。

### (4) 煙跡(図版3~7)

調査区の広い範囲で小溝群を検出した。小溝群は、周辺の調査事例から近世の烟跡に伴う畝溝と考えられるが、一部の畝溝は中世まで遡る可能性もある。畝溝は主軸方位の違いから、東西畝と南北畝に大別される。東西畝と南北畝の新旧は平面観察では難しく、P11グリッド付近のE-F断面、Q5グリッドのL断面で確認した限りは、南北畝が新しいと判断された。

**東西歓（第19図）** 東西方向の歓溝は、四方荒屋遺跡の東部から四方背戸割遺跡の北東部にかけて検出された。南北方向の歓溝に比べ検出範囲が狭く、歓溝の重複はほとんどみられない。東西の歓溝は大きく5区画に分けられ、隣接する区画間（区画3・4間を除く）には、通路と考えられる幅5m前後の空間が存在する。東西の歓溝の覆土は地山塊を多く含む褐色灰色土である。

区画1は東西幅15m、南北幅8m以上である。方位はN-82°-Eを示し、他の区画と異なる。歓溝は概ね幅25~60cm、深さ5~10cm、途中で途切れるところなく整然と並ぶ。歓幅は50~60cmとなる。

区画2は東西幅25m以上、南北幅20mほどである。歓溝は概ね幅15~60cm、深さ5~15cmで、途中で短く途切れるものもある。方位はN-76°-Wを示す。歓幅40~80cmが主体で、ばらつきがある。

区画3は東西幅20m以上、南北幅15mほどである。区画4とは南端が重なることから、前後関係が想定される。歓溝は概ね幅25~50cm、深さ5~15cm、途中で短く途切れるものもある。方位はN-75°-Wを示す。歓幅は50~80cmで、ばらつきがある。

区画4は東西幅25m以上、南北幅17mほどである。歓溝は概ね幅15~55cm、深さ5~15cm、南北側ほど短く途切れる傾向にある。方位はN-83°-Wを示す。歓幅は60~80cmである。

区画5は東西幅15m以上、南北幅20mほどである。歓溝は概ね幅15~70cm、深さ5~15cm、短く途切れるものが多い。方位はN-81°-Wを示す。歓幅は50~80cmが主体である。

遺物は弥生土器壺（60）、土師器甕（29・30）があるが、近世のものは出土しなかった。

**南北歓（第20図）** 南北方向の歓溝は調査区のほぼ全域に広がり、とくに四方背戸割遺跡の北東部から四方荒屋遺跡にかけて集中する。南北の歓溝は大きく6区画に分けられ、区画1は歓溝の重複が著しい中心部分、区画2~6は区画1の周囲にあって歓溝の重複が少ない部分である。南北の歓溝の覆土は、東西の歓溝と比較して黒色が強く、含まれる地山塊が小さく、量も少ない点が異なっている。

区画1は東西幅50m、南北幅75m以上の広い区画で、北へ延びている。区画1の歓溝は、その重複状況から、少なくとも3段階の変遷が見込まれる。歓溝の多くは概ね幅15~80cm、深さ5~15cmである。方位はN-1~15°-Eを示す。歓幅は60~80cmと想定されるが、重複が著しいため不確実である。一部の歓溝には底面に連続する小ピットを伴うものがあり、区画1の北東側・南西側の2ヶ所に分布する（第20図）。小ピットは概ね径15~25cm、深さ5~10cmである。小ピットは、歓立てなどの際に使用した農具の痕跡と考えられ、高歓にするためにより深く掘り込んだものと考えられる。このうち北東側のものは歓幅が1.4~2.2mと、通常の歓幅より広くなっている。

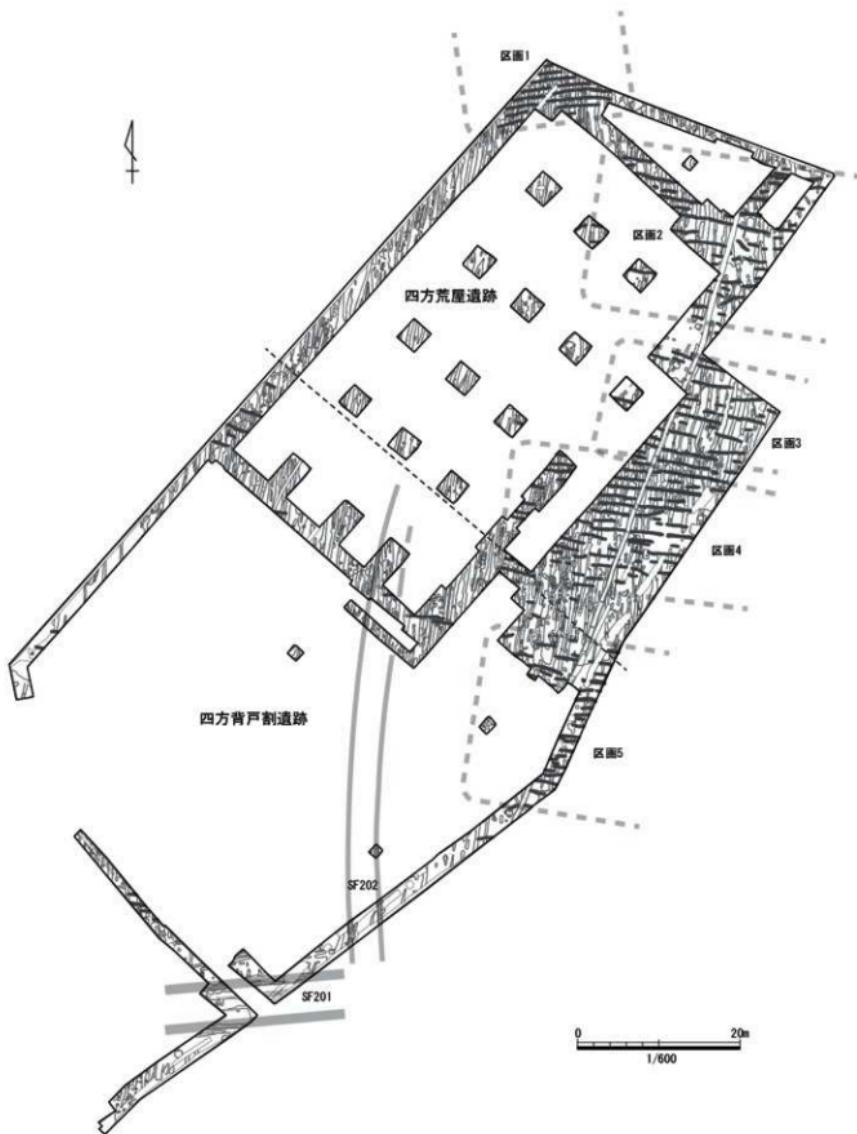
区画2は東西幅25m以上、南北幅50m以上である。歓溝は概ね幅20~70cm、深さ5~10cmである。歓溝は緩やかな蛇行がみられるが、主軸となる方位はN-5°-Eである。歓溝の重複は、北側や南側で部分的にみられる。歓幅は50~70cmである。

区画3は東西幅15m以上、南北幅30mほどである。歓溝は概ね幅20~60cm、深さ5~10cmである。短く途切れるものが多く、歓溝の重複はほとんどみられない。主軸方位はN-10°-Eである。歓幅は50~80cmである。

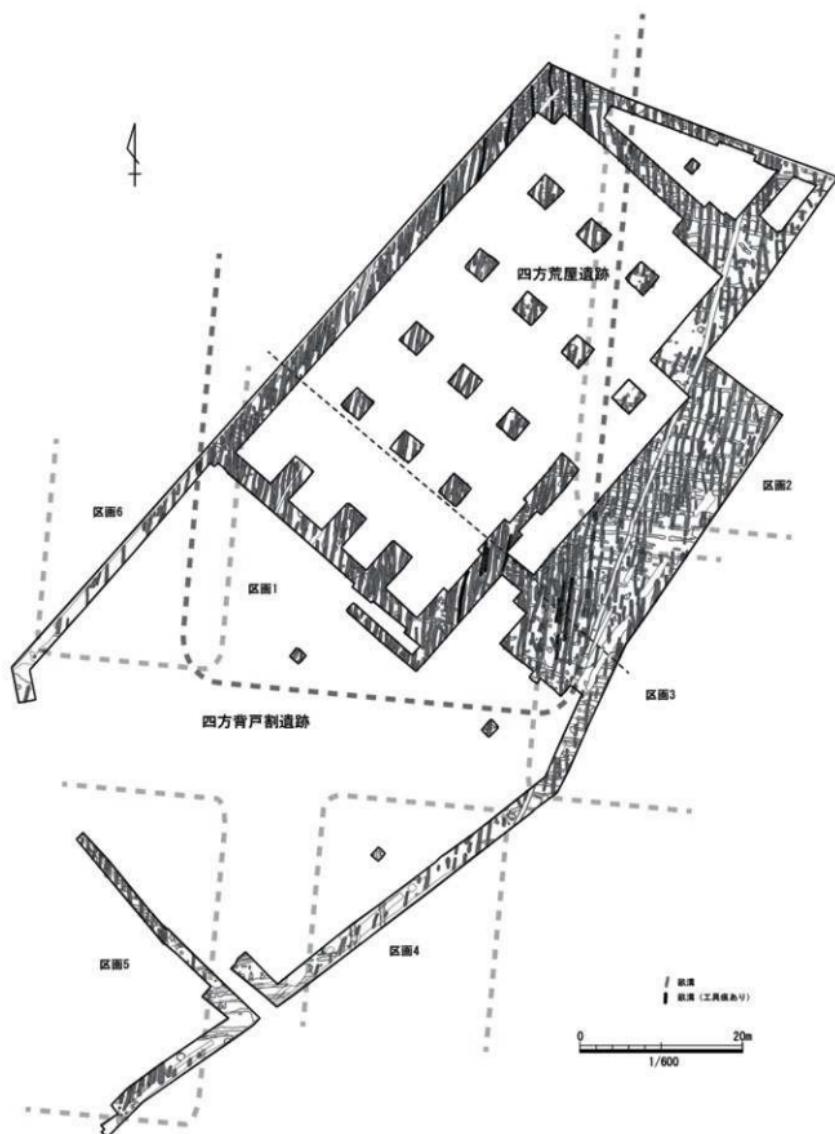
区画4は東西幅20m、南北幅20m以上である。歓溝は概ね幅15~50cm、深さ5~10cmである。短く途切れるものが多く、歓溝の重複はみられない。主軸方位はN-8°-E、歓幅は60~70cmである。

区画5は東西幅15m以上、南北幅30m以上である。歓溝は概ね幅25~80cm、深さ5~15cmである。歓溝がやや密になっており、2段階の変遷が想定される。主軸方位はN-5°-Eである。歓幅は50~70cmと想定される。

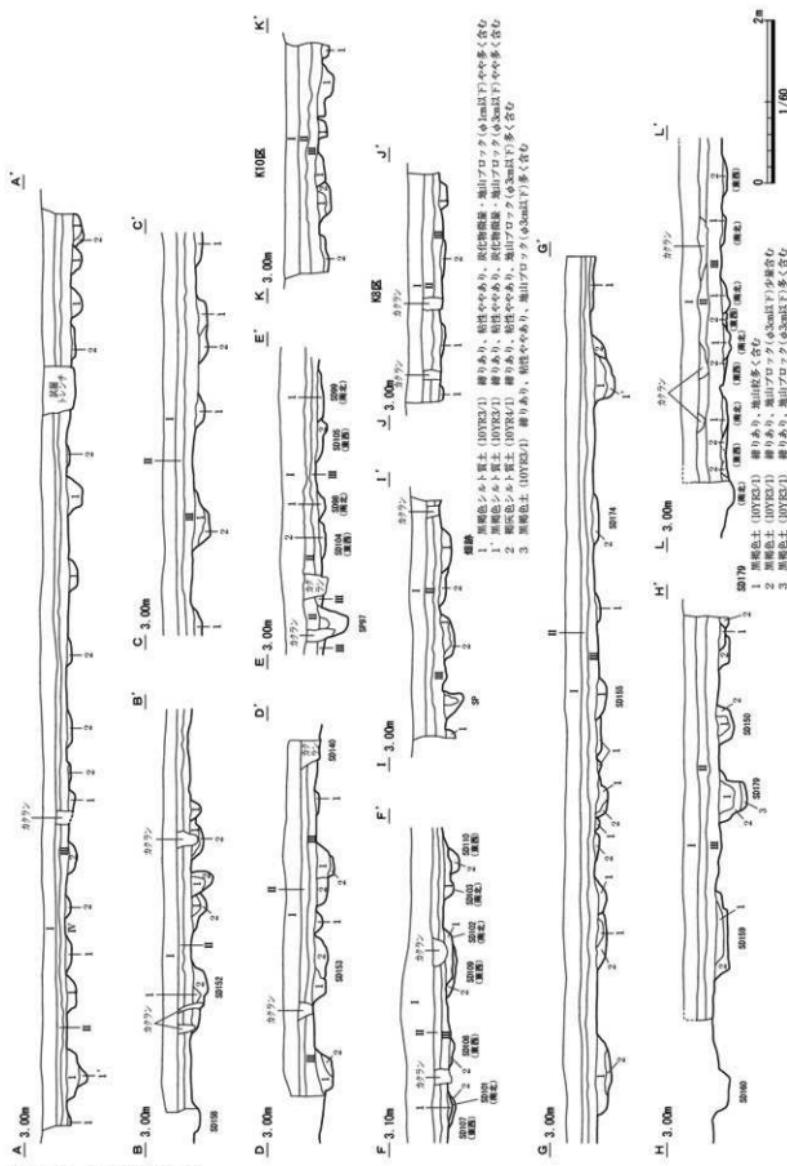
区画6は東西幅20m、南北幅25m以上である。歓溝は概ね幅15~40cm、深さ5~10cmである。短く途切れるものが多く、歓溝の重複はみられない。主軸方位はN-2°-E、歓幅は50~80cmである。



第19図 畑跡（東西歓）



第20図 煙跡（南北款）



第21図 燐跡断面図 (1)

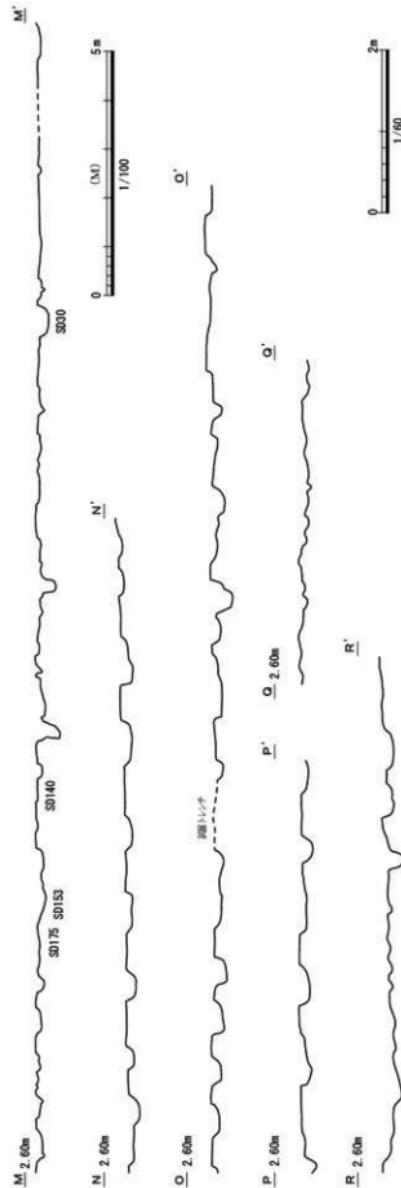
遺物は弥生土器壺(52・53)・甕(43・50・53)、土師器甕(31)、埠(37)があるが、近世のものは出土しなかった。

#### (5) ピット

ピットは四方背戸割遺跡の南側から西側を除き、調査区に広く分布するが、烟跡の畝溝底面の凹凸との区別が難しいものも多く、正確な数は明らかにできない。集中的に分布するのは、K15、N14、R7、R10、S5 グリッドの5ヶ所があり、掘立柱建物や柵などが存在した可能性がある。ピットのほとんどは径 20 ~ 30 cm の円形で、深さ 15 ~ 20 cm のものが多い。遺物は下層の弥生土器の混入がごく少量あるが、古代以降のものは出土しなかった。

#### (6) 地震痕

四方背戸割遺跡において、地震に伴う噴砂を検出した(第5・6図、図版10)。東西方向に延びるものが多い。下層調査の断面観察によれば、噴砂は基本層序VI層より下から噴き出し、IV層を越えていた。噴砂の下部は粗砂、上部は黄白色の細砂が主体となるが、細砂の一部では引き裂かれたIV・V層とが混入する場所もあった。またV層中にV層ないしIV層が二次的に落ち込んだ帶状の変色部分もあり、地割れによる落ち込みと判断された。地割れと噴砂は切り合いがあり、噴砂が新しい。噴砂は近世の烟跡より新しく、近代以降の溝 SD30 より古いこと、平成 17 年度調査(四方背戸割遺跡)で指摘された新旧のある噴砂の灰褐色の噴砂に類似することから、1858 年の飛越地震によるものと考えられる。噴砂に先行する地割れを引き起こした地震は、平成 17 年度調査で指摘された 1586 年の天正地震、あるいは平成 25 年度調査(四方荒屋遺跡)で指摘された 863 年の貞觀地震が候補になる。



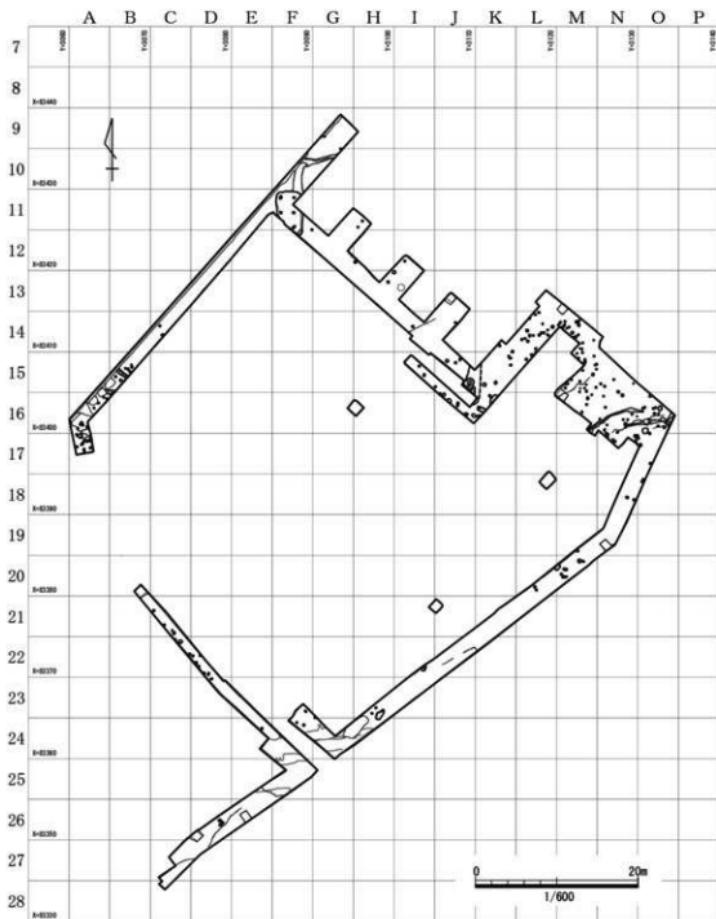
第 22 図 煙跡断面図(2)

## 2 下層遺構（四方背戸削遺跡）

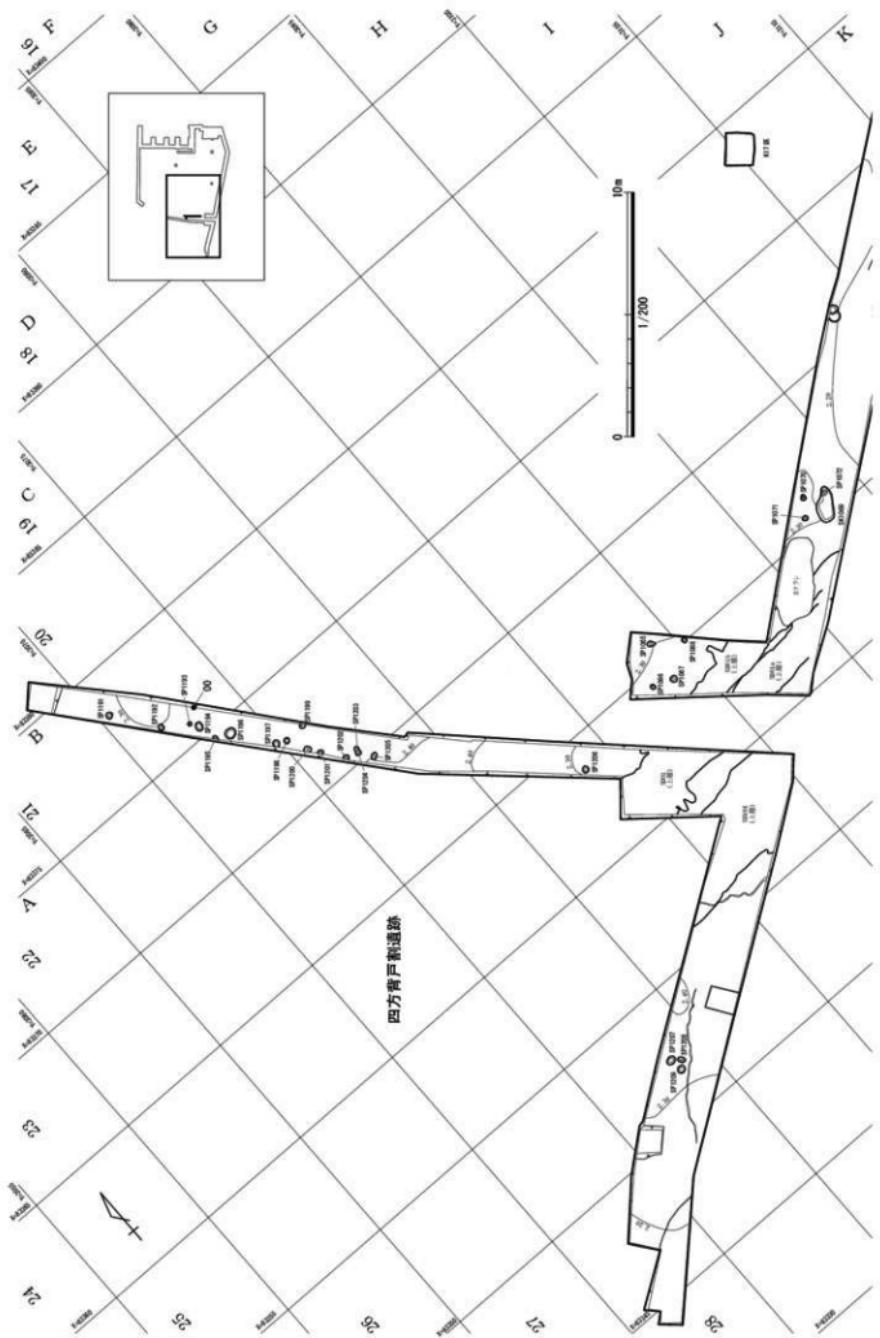
四方背戸削遺跡で実施した下層調査では、土坑2基、溝2条、ピット205基、その他不明遺構3基を検出した（第23～26図）。遺構の分布は、下層の地山V層が低くなる北東側にややまとまる傾向があるものの、全体に散在的で、南側はとくに少ない。下層の遺構番号は4桁（1001～）で表記した。

## (1) 土坑

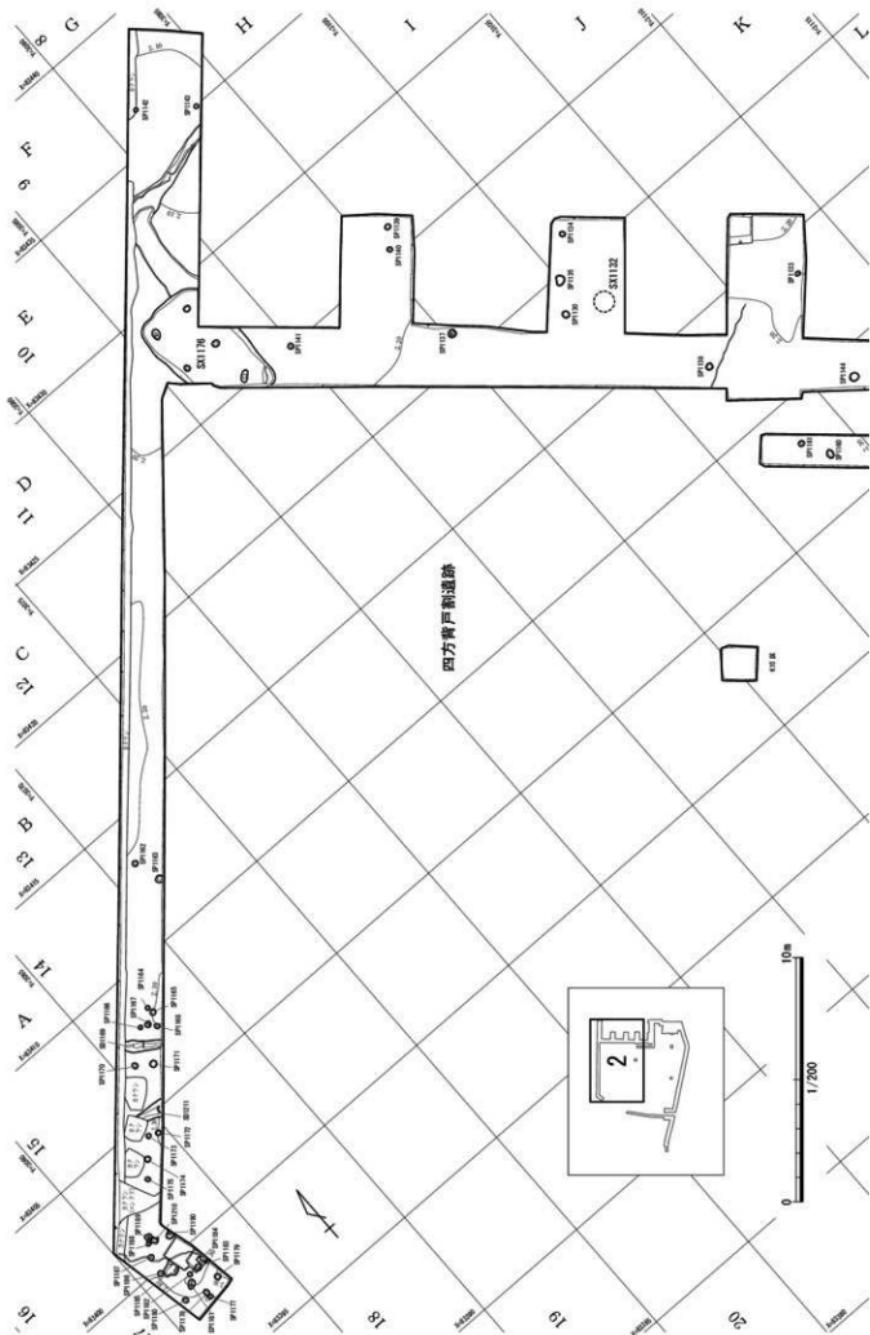
SK1001（第27図、巻頭3・図版9）K15～J16グリッドに位置する。東西1.40～2.08m、南北5.1m以上の長楕円形と推定され、北側は調査区外へ延びる。東辺は上層遺構SD152に削平され不明瞭であつ



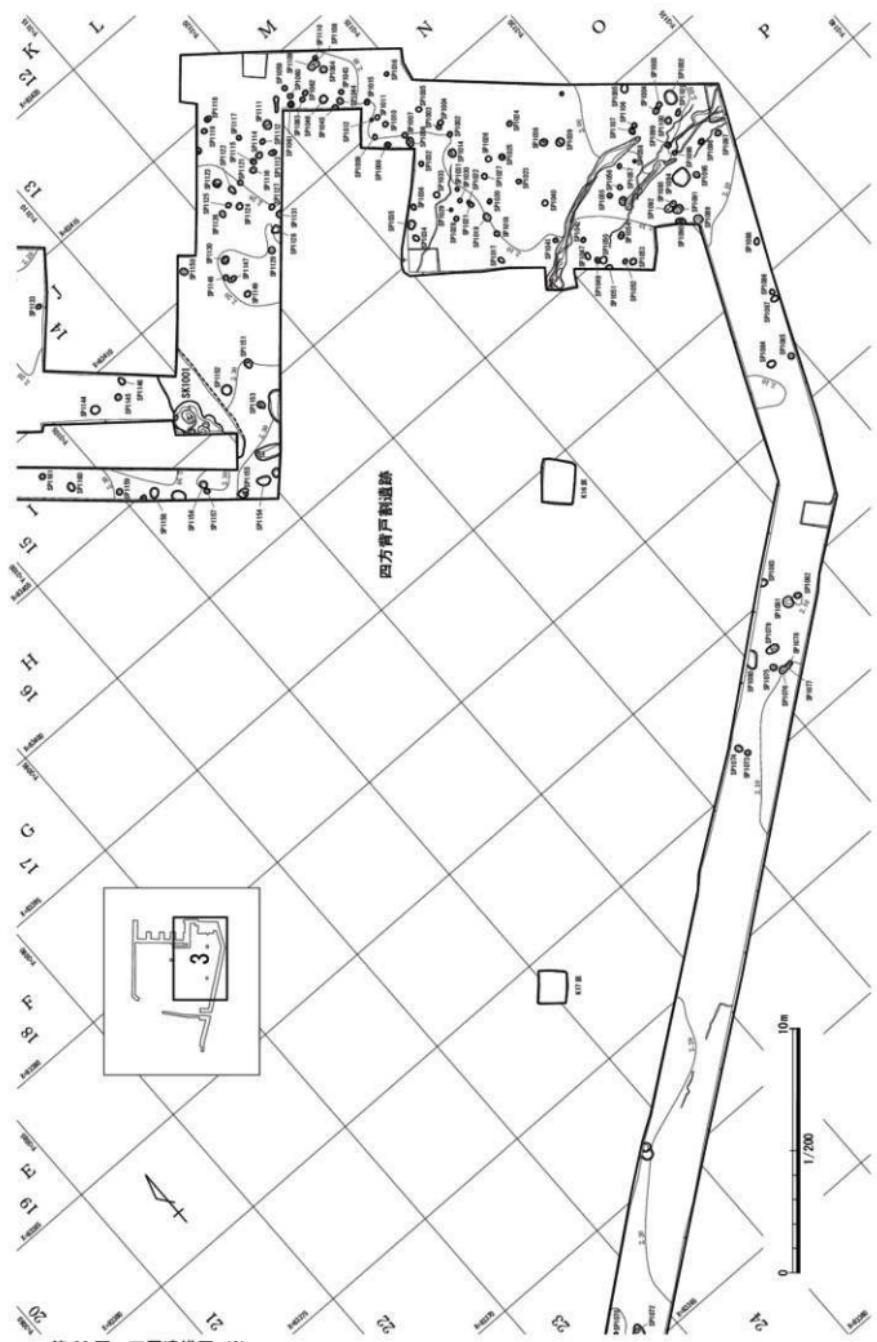
第23図 下層調査区全体図



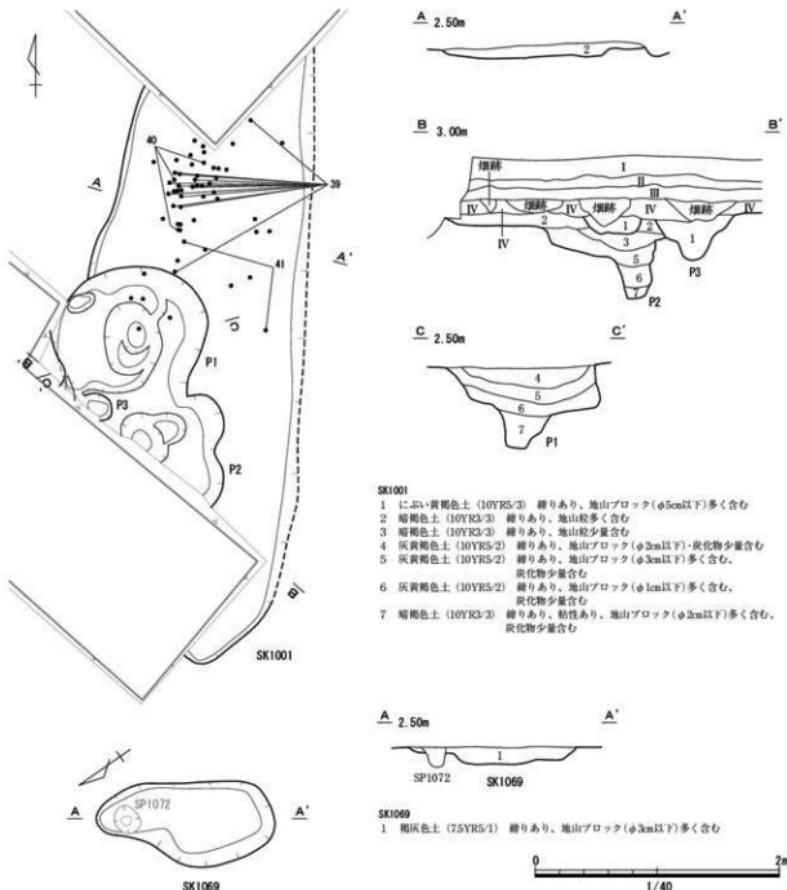
第24図 下層遺構図(1)



第25図 下層遺構図(2)



第 26 図 下層遺構図 (3)



第27図 下層土坑遺構図

た。長軸方位はN-4°-Eを示す。深さは5~8cmで、底面は平坦である。南西側には、径1.07~1.28m、深さ0.76mのP1、径0.99m、深さ0.66mのP2がある。P3は径0.62m、深さ0.41mで、P2の埋没後に掘り込まれている。覆土は2層（暗褐色土）が主体で、P1・P2内は地山塊を含む。P1内の4層に炭化物が含まれたことから、放射性炭素年代測定を実施し、ca1BC198~ca1BC52の年代を得た（第4章）。遺物は北側に集中し、弥生土器の甕（39~42）が出土した。40はP1出土の破片も接合した。

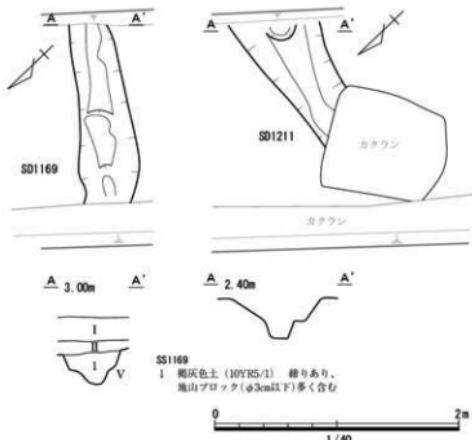
SK1069（第27図）H23-H24グリッドに位置する。長軸1.45m、短軸0.70mの不整楕円形を呈する。長軸方位はN-31°-Eを示す。深さは13cmである。SP1072と重複し、SK1069が古い。出土遺物は

ない。

### (2) 溝

**SD1169** (第28図、図版9) B15 グリッドに位置する。規模は上幅50cm、下幅9cmである。深さ17～39cmで、北西に向かって深くなる。主軸方位はN-52°-Wを示す。出土遺物はない。

**SD1211** (第28図) A15～B16 グリッドに位置する。規模は上幅43～63cm、下幅12～29cmである。深さは18cmで、南東端はピット状に15cm深くなる。主軸方位はN-83°-Wを示す。出土遺物はない。



第28図 下層溝遺構図

### (3) ピット

ピットは約205基検出された。北東側と西側でやや密に分布し、北側と南側は散漫な分布である。ピットは概ね径15～30cm、深さ5～25cmである。覆土は大半が灰褐色土の単層で、2層になる場合は下層に地山塊が多く混入する傾向がある。出土遺物はなかった。

### (4) その他不明遺構

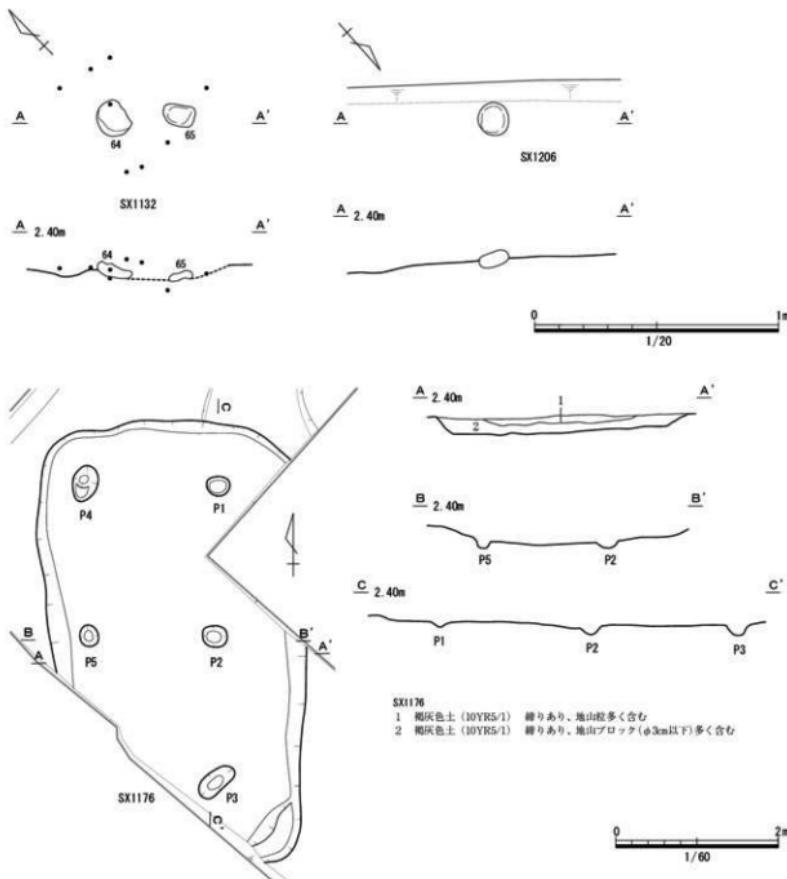
**SX1132** (第29図、図版3・図版10) II3グリッドに位置する。径50～60cmの範囲内に打製石斧の未完成品2点(64・65)と剥片8点が出土したものである。V層上面で検出したが、掘り込みはもたず、未完成品の周間に剥片が点在した状況であった。同一の石材であるが、接合はしなかった。

**SX1176** (第29図、図版10) F11-F12グリッドに位置する。南北5.4m、東西3.1mの隅丸長方形で、長軸はN-1°-Eを示す。壁面はしっかりととした掘り込みではなく、緩やかな傾斜である。深さは20cm、底面は平坦である。底面には推定6基のピットが等間隔で並ぶが、長軸の中心は床の中心から西へずれた位置にある。ピットは径26～51cmの円形ないし梢円形で、深さは9～21cmである。ピット間の距離は南北で1.80～1.92m、東西で1.54～1.66mである。建物跡の可能性も考えられたが、焼土や炭化物、遺物もまったく出土しなかった。

**SX1206** (第29図、図版10) M14グリッドに位置する。V層上面で偏平礫が単独で出土したものである。V層に疊は含まれないので、人為的に残されたものと考えられる。周囲にはピットが多数あり、関連性が窺われる。

## 第4節 遺 物

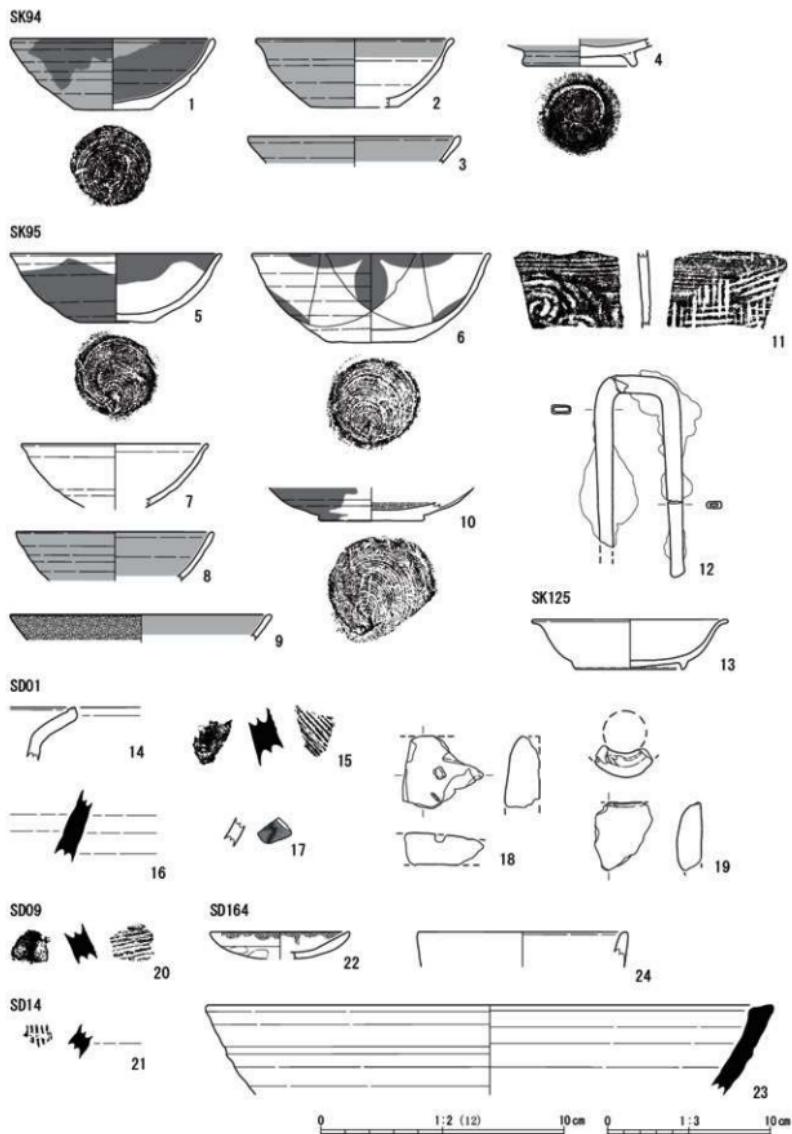
出土遺物は上層(古墳時代～近世)、下層(弥生時代)、試掘調査に分けられる。上層に混入した弥生土器などは、下層遺物として扱った。



第29図 下層不明遺構遺構図

### 1 上層出土遺物

古墳時代の土師器、古代の土師器・須恵器・白磁、中世の土師器・珠洲、近世の瀬戸美濃・越中瀬戸、鉄製品、壇、土錐などがある。上層遺構に伴う遺物は、四方荒屋遺跡の土坑 SK94・95・125、四方背戸割遺跡の溝 SD01・164 (SF201)、SD09・14 (SF202) がある。その他は烟跡の畠溝に混入したものが大部分を占めるが、総じて遺物の出土量は少ない。古代の土師器は壺・壇・甕があり、四方荒屋遺跡に多い。SK94・95の壺は回転糸切り底で、赤彩を施したもの、煤・油煙が付着したものがある。須恵器は非常に少なく、壺・壺・甕が数点出土した。中世の土師器皿や珠洲は、四方背戸割遺跡



第30図 上層出土遺物図(1)

の SD01・164 (SF201)、SD09・14 (SF202) で出土しただけである。

SK94 (第30図、巻頭4・図版11) 1~3は土師器塊である。口径12.0~13.0cm、回転糸切り底である。内外面に赤彩が施され、1は内外面に煤が付着する。4は高台の付く皿で、回転糸切り底である。内外面赤彩を施す。9世紀後半のものである。

SK95 (第30図、巻頭4・図版11) 5~10は土師器塊である。口径11.4~16.0cm、回転糸切り底である。8・9は内外面赤彩を施す。5・6・10は口縁部に打ち欠きがあり、煤や油煙が付着することから、灯明皿として利用されている。9も油煙の付着がある。6には割れて破片化した後に付着した煤もみられる。9世紀後半のものである。11はロクロ成形の土師器塊で下半はタタキと当て具痕が残る。12は逆U字状に折れ曲がる鉄製品である。断面は長方形で中空である。

SK125 (第30図、図版11) 13は白磁碗である。口径11.8cm、器高6.4cmと浅く、内湾する体部から外反する口縁部へ立ち上がる。太宰府編年の椀VI類 (11c後半~12c前半) に該当する。

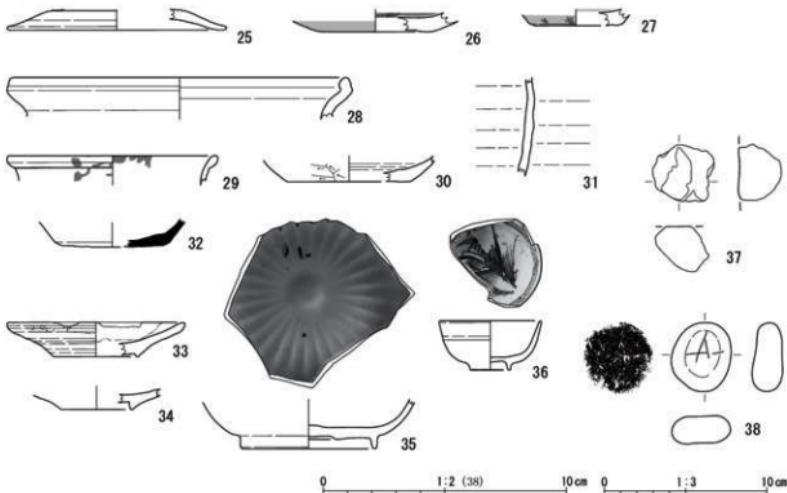
SD01 (第30図、図版12) 14はロクロ成形の土師器塊である。口縁端部を折り込み、内側に稜をもつ。9世紀後半のもの。15は珠洲の甕、16は鉢である。17は肥前染付の皿ないし鉢である。18は板状の土製品で、埠とみられる。還元炎焼成である。19は土錐の端部である。

SD09 (第30図、図版12) 20は珠洲の甕の細片である。

SD14 (第30図、図版12) 21は珠洲の甕の細片で、胎土に海綿骨針を含む。

SD164 (第30図、図版12) 22は中世土師器の皿で、口径8.5cmの非ロクロ成形。内外面に油煙が付着する。15世紀のもの。23は珠洲の鉢である。内湾気味の体部から口縁端部は三角形状に收める。外面のロクロ痕が強く、胎土に海綿骨針を含む。珠洲IV期(1280~1370年代)のもの。24は陶器椀で、口縁部が垂直になる筒形碗か。口径12.9cmで、内外面に錫釉を施す。

#### その他



第31図 上層出土遺物図 (2)

その他（第31図、図版11・12） 番跡の畝溝やピット、確認面で出土した遺物である。

25は土師器高坏の脚部で、古墳時代のものか。上部に浅い沈線がある。26は内黒の土師器坏で、回転糸切り底である。外面は赤彩を施し、胎土には海綿骨針が含まれる。9世紀前半のもの。27は土師器塊で、内外面に赤彩を施す。9世紀後半のもの。28～31はロクロ成形の土師器甕で、9世紀代のものである。28は口縁端部を屈曲させ、外面に浅い沈線を施す。29は肥厚する口縁部の内外面に煤が付着する。30は胴部から底部にかけての外面を手持ちヘラケズリする。

32は須恵器の坏Aで、底部はヘラ切り。9世紀代のものである。

33・34は越中瀬戸である。33は削り出し高台の皿で、体部から口縁部へ直線的に立ち上がる。口縁部内外面に灰釉を施す内凸皿である。34は付高台の皿である。

35は肥前の中皿（臉皿）で、底部は蛇ノ目凹形高台である。鎬のある菊花形で、見込みに上絵の痕跡が残る。36は瀬戸美濃の碗である。コバルト色の染付で、雷文・山水文を描く。近代のもの。

37は板状の土製品で、埠とみられる。酸化炎焼成である。

38は径3.0cm未満の小石で、表面に線刻がある。

## 2 下層出土遺物

弥生時代中期の土坑SK1001出土土器のほか、確認面や上層遺構へ混入したものを下層出土遺物として扱った。弥生時代中期から後期の土器、石器がある（第32・33図）。

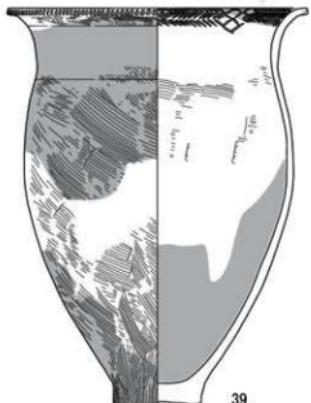
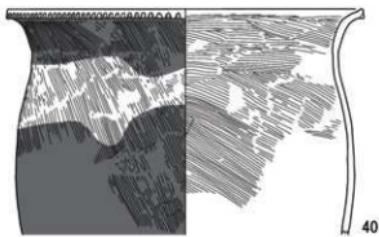
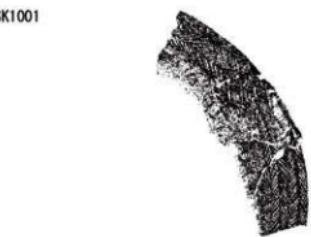
SK1001（第32図、巻頭4・図版13） 39～42は弥生時代中期の土器である。39は器高24.35cmの甕である。器面はハケ調整後に内面はナデ消し、口縁端部にキザミ、口縁部内面には羽状文を施す。内外面に煤付着。40は口径21.8cmの甕で、器面はハケ調整後に内面胴部下半はナデ。口縁端部外面にキザミを施す。外面に煤が付着。41・42は甕の底部で、42は小型である。41は胎土に海綿骨針を多く含む。

その他（第32・33図、図版11～14） SK1001以外のものである。43～60は弥生土器である。43は甕で、口径16.0cm、内外面ハケ調整である。外面に煤が付着する。44はハケ調整の甕の底部である。

45は胴部がソロバン玉状になる壺である。胴部最大径下にある低い突帯にキザミを入れる。胴部上半は櫛描直線文と二枚貝の刺突による擬繩文がわざかに残る。東海地方の貝田町式土器にみられる特徴を備える。胎土に海綿骨針を含む。46～48は面取りした口縁端部にキザミのある甕である。ハケ調整で、外面に煤が付着する。49は口縁部内面に斜行短線文を羽状に施す甕、50は口縁部内面羽状文の甕である。51は端部を面取りした甕の口縁部で、外面には沈線により2条の直線文と連弧文を施す。52は壺の胴部で、2段の円形刺突文の下に沈線が三角形状に施される。53は壺の胴部で、櫛描直線文と波状文が2段に施される。胎土に海綿骨針を含む。54・55は甕の口縁部である。端部内外面にキザミ、その下に内面2条の沈線、外面は斜位の繩文施文後に1条の沈線を施す。55は胎土に海綿骨針を含む。56は壺の胴下半で、斜位の繩文施文後に沈線を施す。57～59は繩文を施した甕の胴部である。59は内面ケズリである。57は胎土に海綿骨針を含む。60は壺の胴部で、沈線で直線文・連弧文を施す。51・54～60は、多くが繩文を施文し、沈線による連弧文を施すなど、四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡の過去の調査で出土した天王山式土器（弥生時代後期前半）に類似するものである。その他は弥生時代中期の土器である。

61～65は石器・石製品である。61・62は四方荒屋遺跡出土で、61が平基有茎式の石鎌、62は敲石である。63～65は四方背戸割遺跡出土である。63はSK1001付近の上層で出土した敲石である。64・65はSX1132で出土した、打製石斧の未成品と考えられるものである。

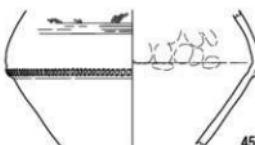
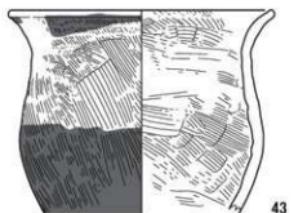
SK1001



41

42

その他



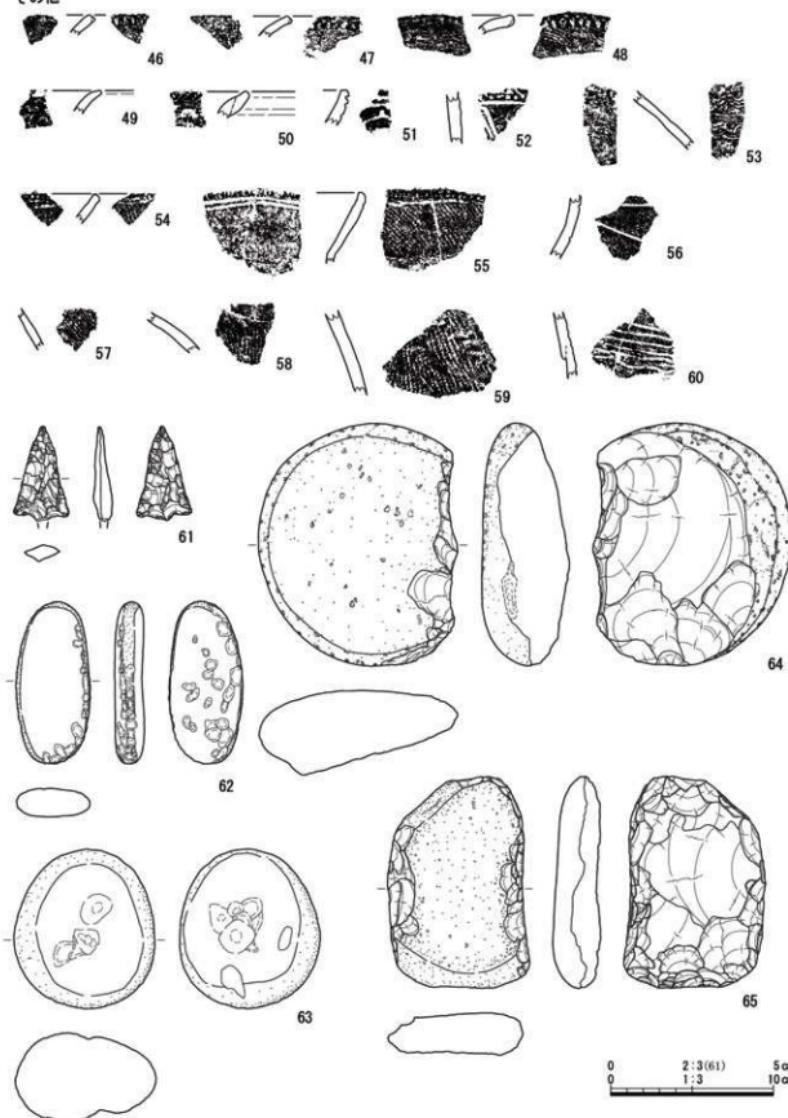
45



0 1:3 10 cm

第32図 下層出土遺物(1)

その他



第33図 下層出土遺物図（2）

## 3 試掘調査出土遺物

試掘トレンチ出土の遺物である（第34図、図版14）。

66～68は弥生土器である。弥生時代中期のもので、66・67は10号トレンチの土器溜りから出土した（第1図）。66は口径21.4cmの甕である。口縁部外面にキザミを施し、内外面ハケ調整、内面下半はハケをナデ消す。外面には煤・焦げが付着する。67は壺の胴部で、内外面ハケ調整である。68は壺の胴部で、櫛描直線文・波状文を施す。内面はハケ調整である。

69は古代土師器の甕で、ロクロ成形である。8世紀代のもの。70は中世土師器の皿である。非ロクロ成形で口縁部にヨコナデを施す。15世紀後半から16世紀のもの。

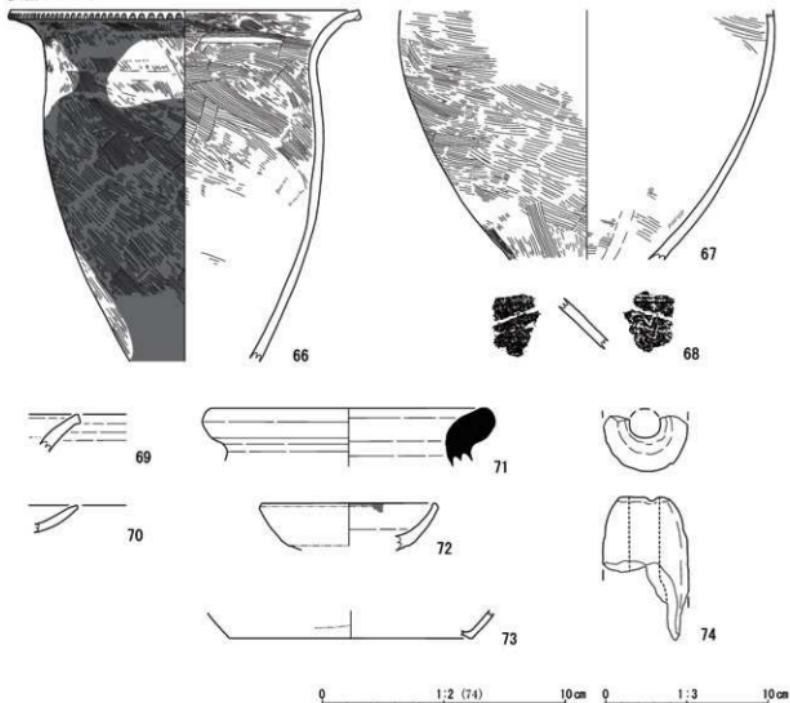
71はSF201に近い11号トレンチ内の東西溝から出土した珠洲である。口径17cmの小型の甕である。珠洲IV期（1280～1370年代）のもの。

72・73は瀬戸美濃系の陶器である。72は口縁部内面に煤が付着する灯明皿である。内外面灰釉で口唇部は鉄釉を施す。73は土瓶とみられる底部である。内外面に灰釉がかかる。

74は土錘である。孔径1.25cm。

（常深）

試掘トレンチ



第34図 試掘調査出土遺物図

第1表 遺物観察表(1)

番号	出土構 造位	種別	器種等	法 量(cm)			胎 土	焼成	色調 (外面)	成・整形	文様ほか、備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)					
1	SK94	土師器	壺	(12.4)	4.8	5.40	密、角閃石・ 白色粒	良好	5YR6/4 にぶい赤褐色	ロクロ成形、底部右回転 系切り	内外面赤彩、口縁部外 面に保付着
2	SK94	土師器	壺	(12.0)	(5.3)	4.25	密、海綿骨針 痕量	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形、底部右回転 系切り	外面と口縁部内面赤彩
3	SK94	土師器	壺	(13.0)	-	(1.90)	密	良好	5YR5/9 明赤褐色	ロクロ成形	口縁部内面赤彩
4	SK94	土師器	皿	-	6.5	(1.70)	密、石英・白 色粒	良好	5YR6/8 橙	ロクロ成形、底部右回転 系切り	底部内外面赤彩
5	SK95	土師器	壺 (灯明皿)	12.8	4.9	4.25	密、石英・角 閃石	良好	7.5YR8/4 浅黃褐色	ロクロ成形、底部右回転 系切り	外面上と口縁部内面に保付 着
6	SK95	土師器	壺 (灯明皿)	(14.5)	5.5	5.50	密、石英・白 色粒	良好	5YR7/6 橙	ロクロ成形、底部右回転 系切り	口縁部内外面に保付着、 体部の縫は削れた後の付 着
7	SK95	土師器	壺	(11.4)	-	(3.90)	密、石英・角 閃石・白色粒	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形	
8	SK95	土師器	壺	(12.0)	-	(3.00)	密、石英・白 色粒	良好	5YR6/6 橙	ロクロ成形	口縁部内面赤彩
9	SK95	土師器	壺 (灯明皿)	(16.0)	-	(1.65)	密、白色粒	良好	7.5YR3/1 黒褐色	ロクロ成形	口縁部内外面赤彩、口縁 部外面に油漬付着
10	SK95	土師器	壺 (灯明皿)	-	(6.2)	(2.05)	密、石英・白 色粒	良好	7.5YR6/3 にぶい黒褐色	ロクロ成形、底部右回転 系切り	体部～底部外面に保付着、 体部～底部内面に保付 着
11	SK95	土師器	甕	-	-	(4.75)	密、石英・赤 褐色・白色粒	良好	10YR2/4 にぶい黄褐色	ロクロ成形、腹部上半外 面カキツ、腹底下半外 面タタキ・内面当て具痕	胴部内面に保付着
12	SK95	鉄製品	不明	残長 (8.3)	残幅 3.6	残厚 0.35	複合U字状になる鉄製品で、断面は長方形(幅6.0～7.5mm・厚さ2.5～3.5mm)で中空となる。				
13	SK125 (K6区)	自磁	瓶	(11.8)	(6.4)	(6.40)	精良	良好	7.5YR7/1 灰白	ロクロ成形	高台置付は無袖。太宰府 陶平彌VI類 (11c後半～12c前半)
14	SD01	土師器	甕	-	-	(3.10)	密、石英・白 色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形	
15	SD01	珠洲	甕	-	-	(3.50)	密、白色粒	良好	2.5Y1/1 黄褐色	胴部外面タタキ・胴部内 面ナデ	
16	SD01	珠洲	擂鉢	-	-	(4.35)	密、石英	良好	N4/0 灰	ロクロ成形	体部内面に自然釉
17	SD01	肥前	大量また は鉢	-	-	(1.75)	密	良好	7.5YR7/1 明緑灰		染付、透明釉(質入る)
18	SD01	土製品	埠か	残長 (4.4)	残幅 (5.0)	残厚 (2.15)	粒度普通、白 色粒・小石	良好	2.5Y7/2 灰黄褐色	ナデ	
19	SD01	土製品	土拂	残長 (4.2)	残幅 (3.6)	残厚 (1.50)	密、石英・赤 褐色	良好	7.5YR7/6 橙	ナデ、上端部に平坦面 重さ 29.82g	
20	SD09	珠洲	甕	-	-	(2.45)	密、白色粒	良好	5Y6/1 灰	胴部外面タタキ・胴部内 面ナデ	
21	SD14	珠洲	甕	-	-	(2.05)	密、海綿骨針・ 白色粒	良好	10Y2/1 黑	ロ頭部外面ロクロナデ。 ロ頭部内面タタキ	口頭部外面に自然釉
22	SD164	中世土師 器	皿 (灯明皿)	(8.5)	-	(1.65)	密、赤褐色	良好	5YR7/6 橙	非ロクロ成形、内外面ヨ ナデ。体部外面ユビオ サエ	口縁部内外面に油漬付着
23	SD164	珠洲	擂鉢	(34.7)	-	(5.50)	密、海綿骨針・ 白色粒	普通	7.5YR5/1 黒褐色	ロクロ成形	古開闢年鉢 b9 類 (IV 1～ IV 2 周)
24	SD164	陶器	筒形碗	(12.9)	-	(2.15)	密、石英	良好	2.5YR5/6 明赤褐色	ロクロ成形	内外面に精緻
25	確認面 (TA)	土師器	高坏	-	(13.0)	(1.25)	粒度普通、石 英・角閃石・白 色粒	良好	5YR7/6 橙	脚部ヨコナデ	脚部外面に沈線2条
26	残土 (YKS)	土師器	坏	-	(6.0)	(1.15)	密、石英・海 綿骨針	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形、底部回転系 切り	体部外面赤彩、内面黑色 處理
27	SK163	土師器	壺	-	(5.6)	(1.0)	密、石英	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	体部外面ハケ	体部～底部内外面赤彩
28	SD30	土師器	甕	(20.3)	-	(2.60)	密、石英・白 色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロ成形	
29	SD118	土師器	甕	(12.8)	-	(1.80)	密、白色粒	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	ロクロ成形	口縁部内外面に保付着
30	SD49	土師器	甕	-	(7.6)	(1.60)	密、石英・赤 褐色・白色粒	良好	7.5YR2/1 黑	ロクロ成形。外腹側部～ 底部ケズリ、内腹側部～ 底部ロクロナデ	外腹側部～底部に保付着

第2表 遺物観察表(2)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法量(cm) (○は推定値、△は既存値)			胎土	焼成	色調 (外側)	成・整形	文様ほか、備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)					
31	SD151	土師器	甕	-	-	(7.05)	密、石英・赤褐色・白色粒	良好	5YR7/6 褐	ロクロ成形	
32	残土 (YKS)	須恵器	环A	-	(6.2)	(1.75)	密、白色粒	良好	2, SY5/1 黄灰	ロクロ成形	
33	SD30	越中漸層	皿	(10.8)	(5.2)	(2.16)	密、石英	良好	7, SYR6/4 にぶい	ロクロ成形、体部外面ヶ ズリ。削り出し窓台	口縁部外面に灰釉、見 込みに重ね焼き痕
34	試掘堆土 (YKS)	越中漸層	皿	-	(4.3)	(1.45)	密、石英・白 色粒	良好	10YR7/4 にぶい・黄橙	ロクロ成形、付高台	残存範囲は無軸
35	確認面 (YAS)	肥前 (中皿)	中皿	-	8.1	(3.05)	密	良好	10GY8/1 明緑灰	ロクロ成形、蛇目圓形 高台	内面菊花文(上絵剥落)
36	カケラン (YKS)	瀬戸美濃	碗	(6.2)	2.4	3.05	密	良好	6YR8/1 灰白	ロクロ成形、体部外面に 弱い模	染付(内面雷文・山水文等、 裏面は無軸)
37	SD161	土製品	埠か	残長 (3.5)	残幅 (3.8)	残厚 (2.80)	粒度普通、石 英	良好 酸化灰	10YR7/4 にぶい・黄橙	ナデ	
38	SP144	石製品	繩刻石	長さ 2.85	幅 2.55	厚 1.25	表面滑らかな小石の片面に線刻、重さ 11.57g				
39	SK1001	弥生土器	甕	(18.4)	5.4	24.35	やや密、石英・白 色粒	良好	7, SYR6/4 にぶい	外面口縁部～胴部ハケ、 内面頸部～胴部上半ハケ 後ナデ、胴部下半内面に煤付着	外面口縁端部にキザミ、 口縁部内面斜状文、外面 と胴部下半内面に煤付着
40	SK1001	弥生土器	甕	(21.8)	-	(13.85)	粒度普通、石 英・海綿骨針	良好	10YR7/4 にぶい・黄橙	口縁部内外面ヨコナデ 頭部～胴部外面ハケ、頭 部～胴部内面ハケ、胴部 中位内面ナデ	外面口縁端部にキザミ、 外面上に煤付着
41	SK1001 SB152	弥生土器	甕	-	5.8	(8.35)	密、石英・海 綿骨針(多)	良好	7, SYR4/3 褐	外面胴部ハケ、下端強い ナデ、内面胴部～底部ナ デ	胴部外面に煤付着
42	SK1001 SB152	弥生土器	甕	-	4.6	(7.55)	密、石英・白 色粒	良好	7, SYR5/3 にぶい	外面胴部ヘケ、底部ナデ、 内面胴部～底部ハケ後ナ デ	内面胴部～底部に煤付着
43	SD155 SP156	弥生土器	甕	(16.0)	-	(12.55)	密、石英・赤 褐色・白色粒	良好	7, SYR8/4 浅黄橙	外面口縁部～胴部ハケ 後に一部ナデ消し	外面口縁と胴部下半に 煤付着
44	SD170	弥生土器	甕	-	(5.6)	(4.25)	密、石英・白 色粒	良好	7, SYR6/3 にぶい	胴部外面ハケ、底部外 面ミガキ、胴部内面ナデ	胴部外面に煤付着、胴部 内面に黒斑
45	IV層 (YKS)	弥生土器	壺	-	-	(8.5)	普通、石英・ 海綿骨針	良好	7, SYR7/4 にぶい	胴部外面強烈(ハケ?) 胴部内面ヨコオサエ・ナ デ	胴部最大付近迄の尖折部 にキザミ、上部は輪縮痕 及び二枚貝の刺突(擬 縄文)、東南系(貝田町式)
46	下層遺跡 (YKS)	弥生土器	甕	-	-	(1.20)	密、石英・赤 褐色	良好	7, SYR1/7/1 白	口縁部外面部ヨコナデ、口 縁部内面ハケ	外面口縁端部にキザミ、 外面上に煤付着
47	下層遺跡 (YKS)	弥生土器	甕	-	-	(1.25)	密、石英	良好	SYR4/3 にぶい	口縁部内外面ヨコナデ、 口縁部内面ハケ	外面口縁端部にキザミ、 外面上に煤付着
48	下層遺跡 (YKS)	弥生土器	甕	-	-	(1.15)	密、石英・白 色粒	良好	7, SYR5/3 にぶい	口縁部内外面ヨコナデ、 口縁部外面部ハケ	外面口縁端部にキザミ、 外面上に煤付着
49	SD01	弥生土器	甕	-	-	(1.45)	粒度普通、石 英・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい・黄橙	口縁部ヨコナデ	口縁部内面斜形短線文
50	SD150	弥生土器	甕	-	-	(1.60)	密、石英・赤 褐色	良好	SYR7/6 褐	口縁部内外面ヨコナデ	口縁部内面斜状文
51	確認面 (YAS)	弥生土器	甕	-	-	(2.15)	粒度普通、石 英・白色粒	良好	10YR7/3 にぶい・黄橙	口縁部ナデ	口縁部外面に沈線による 直線文と連弧文
52	SD159	弥生土器	壺	-	-	(3.20)	密、石英・白 色粒	良好	7, SYR7/6 褐	胴部内外面ナデ	胴部外面に沈線と円形刺 突文
53	SD166	弥生土器	壺	-	-	(3.55)	粒度普通、石 英・チャート・ 海綿骨針	普通	7, SYR5/8 明褐色	胴部外面強烈直線文・波 状文、胴部内面ハケ	
54	残土 (YKS)	弥生土器	甕	-	-	(1.80)	密、石英・白 色粒	良好	7, SYR5/4 にぶい		口縁端部外面にキザミ、 口縁部内外面直線文と化粧 文、口縁部内面沈線 2 条
55	SD120・ 上層 確認面 (YAS)	弥生土器	甕	-	-	(4.35)	粒度普通、石 英・海綿骨針・ 白色粒	良好	7, SYR5/3 にぶい	口縁部内外面にキザミ、 口縁部内外面直線文と沈 線、口縁部外面ヨコナデ	口縁部外面に沈線、口縁 端部内外面にキザミと沈 線、口縁部外面ヨコナデ
56	残土 (YKS)	弥生土器	甕か	-	-	(3.90)	密、石英・白 色粒	良好	10YR5/2 黄灰褐	胴部内外面ナデ	胴部外面に沈線と
57	確認面 (YAS)	弥生土器	甕	-	-	(2.50)	粒度普通、石 英・海綿骨針・ 白色粒	良好	7, SYR4/3 褐	胴部内外面ナデ	外面に沈線

第3表 遺物観察表(3)

番号	出土構 造位	種別	器種等	法 量(cm)			焼成	色調 (外面)	成・整形	文様ほか、備考	
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)					
58	確認面 (VA)	弥生土器	甕	-	-	(2.50)	粒度普通。石英・白色粒	良好	10YR5/2 灰黒褐	胸部内外面ナデ	外面に墨文
59	確認面 (VNS)	弥生土器	甕	-	-	(5.20)	密。石英・白色粒	良好	10YR5/3 にぶい黄褐	胸部外面ナデ。胸部内部 ケズリ	外面に墨文
60	SD115	弥生土器	甕	-	-	(4.15)	粒度普通。石英・白色粒	良好	10YR5/3 にぶい黄褐	胸部内外面ナデ	胸部外面に直線文と連弧文
61	確認面 (VA)	石器	石鐵	残長 (2.90)	幅 1.70	厚 0.6	平基有茎(茎部欠損)。重さ 1.60g。				
62	SD116	石器	鐵石	長 9.90	幅 4.60	厚 1.85	偏平な円錐の表裏・側面に縦打痕。全体に摩滅。重さ 136.57g。				
63	SD117	石器	圓石	長 9.8	幅 8.7	厚 5.4	磨滅した円錐の表裏に凹み。重さ 537.45g。				
64	SX1132	石器	未成品 打製石斧か 手斧	長 14.9	幅 12.3	厚 5.3	円錐を打ち割り後に側面を敲打。打製石斧の未成品か。重さ 1157.68g。				
65	SX1132	石器	未成品 打製石斧か 手斧	長 13.0	幅 8.8	厚 2.9	円錐材の上下・側面に敲打痕。自然面残る。打製石斧の未成品か。重さ 488.69g。				
66	試掘 (107)	弥生土器	甕	(21.4)	-	(21.60)	密。石英・白色粒	良好	7.5YR7/4 にぶい黄褐	口縁部外面ヨコナデ。 頭部～胸部外面ハケ、頭部 ～胸部内部ハケ後に胸 部下半ナデ	口縁部にキザミ、外面 に保、焼け付着
67	試掘 (107)	弥生土器	甕	-	-	(15.35)	密。石英・褐色 白色・白色粒	良好	10YR7/4 にぶい黄褐	胸部外面ハケ、胸部内部 ハケ(摩耗)	
68	試掘 (117)	弥生土器	甕	-	-	(3.10)	粒度普通。石 英・白色粒	良好	5YR6/6 級	胸部内部ハケ	胸部外面横擦直線文、墨 状文、胸部外面に保付着
69	試掘 (ST)	土師器	甕	-	-	(2.30)	密。石英・白色 粒	良好	5YR6/4 にぶい級	ロクロ成形	
70	試掘 (37)	中世土師 器	皿	-	-	(1.65)	密。褐色粒	良好	5YR7/6 級	非ロクロ成形、口縁部外 面ヨコナデ	
71	試掘 (117 SD)	珠洲	甕	(17.0)	-	(3.55)	密。白色粒	良好	2.5Y5/1 黄灰	ロクロ成形	口縁部内外面自然釉
72	試掘 (117)	陶器 (瓶)葉 蓋 (灯明皿)	皿	(10.5)	-	(2.90)	密。(7.5YR5/3 にぶい褐)	良好	7.5YR6/2 灰黒	ロクロ成形	内外面灰輪・口縁端部鉄 輪、口縁部内面に保付着
73	試掘 (97)	陶器 (瓶)葉 蓋 (瓶)	土瓶か 手瓶	-	(15.0)	(1.75)	密。(2.5Y6/1 黄)	良好	5Y6/2 灰オリーブ 級	ロクロ成形、頭部外面 ロクロケズリ、頭部内部ロ クロナデ	頭部内面と下端除く外面 ロクロナデ
74	試掘 (77)	土製品	土拂	残長 (5.9)	残幅 (3.5)	-	密。石英	普通	10YR7/3 にぶい黄褐	ナデ	孔径 1.25 cm、重さ 22.73g

## 第4章 自然科学分析

## 第1節 放射性炭素年代測定

## 1 はじめに

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は、富山県富山市四方荒屋地内に所在し、神通川下流左岸の平野部に隣接して立地する遺跡である。これまでの発掘調査で、四方背戸割遺跡からは弥生時代中期～後期の平地式建物、排水路、中世の掘立柱建物などが、四方荒屋遺跡からは区画溝に囲まれた鎌倉～室町時代の屋敷跡などの遺構が確認されている。

本報告では、四方荒屋遺跡および四方背戸割遺跡の土坑から出土した試料を対象に、遺構の年代観に関する情報を得るために、放射性炭素年代測定を実施する。

## 2 試料

試料は、四方荒屋遺跡の土坑 SK95 より採取された炭化材 1 点、および四方背戸割遺跡の土坑

SK1001より採取された炭化材1点の、計2点である。なお、発掘調査の結果、四方荒屋遺跡SK95は平安時代、四方背戸割遺跡SK1001は弥生時代の土坑と推定されている。

### 3 分析方法

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPe cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach, 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正用に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

### 4 結果

結果を第4表、第35図に示す。試料の測定年代(補正年代)は、四方荒屋遺跡SK95出土炭化材が $1,250 \pm 20\text{yrBP}$ 、四方背戸割遺跡SK1001出土炭化材が $2,115 \pm 20\text{yrBP}$ の値を示す。なお、検出された炭化材は破片であったため正確な同定ができなかったが、実体鏡等で試料を観察した結果、四方荒屋遺跡SK95はツヅジ科、四方背戸割遺跡SK1001はハンノキ属の可能性が指摘された。

曆年較正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、曆年代に近づける手法である。曆年較正年代は、測定誤差を $2\sigma$ として計算させた結果、四方荒屋遺跡SK95が $1,272 \sim 1,077\text{ calBP}$ 、四方背戸割遺跡SK1001が $2,147 \sim 2,001\text{ calBP}$ である。

### 5 考察

四方荒屋遺跡の土坑SK95より採取された試料について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で $1,250 \pm 20\text{yrBP}$ 、曆年代で $1,272 \sim 1,077\text{ calBP}$ の値が得られた。本遺構は発掘調査結果から平安時代の可能性が指摘されており、曆年代を見ると7世紀後半～9世紀後半の値が得られている。

第4表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年校正用	曆年校正年代 年代値						確率	Code No.	
						0'	cal AD	702 - cal AD	741	1249 -	1209 calBP	49.1	peI-	PLD-
四方荒屋遺跡 SK95	炭化材 ツツジ科?	AAA	1250±20	-26.02±0.14	1248±19	0'	cal AD	702 - cal AD	741	1249 -	1209 calBP	49.1	peI-	PLD-
						2.0'	cal AD	791 - cal AD	820	1159 -	1130 calBP	19.1	14763	49896
						2.0'	cal AD	678 - cal AD	747	1272 -	1203 calBP	60.7		
						2.0'	cal AD	758 - cal AD	779	1182 -	1172 calBP	5.1		
						2.0'	cal AD	786 - cal AD	830	1164 -	1120 calBP	26.3		
						2.0'	cal AD	854 - cal AD	873	1098 -	1077 calBP	3.4		
四方背戸割遺跡 SK1001	炭化材 ハンノキ属?	AAA	2115±20	-28.03±0.15	2117±22	0'	cal BC	170 - cal BC	101	2119 -	2050 calBP	82.2	peI-	PLD-
						2.0'	cal BC	68 - cal BC	62	2017 -	2009 calBP	6.0	14764	49897
						2.0'	cal BC	198 - cal BC	52	2147 -	2001 calBP	95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,560年を使用。

2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

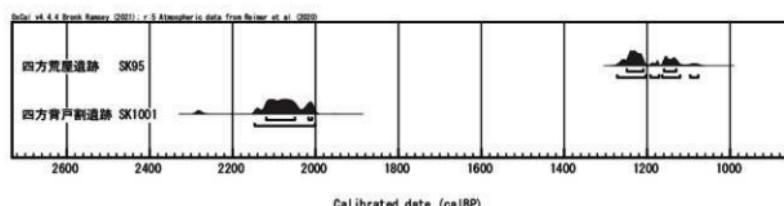
3)H釘した誤差は、測定範囲(測定値の66.5%に入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは酸アーレルガリ一級処理を示す。

5)測年の計算には、Octet4Aを用いる。

6)H釘目を丸めるのが慣例だが、曆年校正曲線や曆年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、H釘目を丸めていない。

8)統計的にH釘の値が入る確率は0.68%, 0.95%である。



第35図 曆年校正結果

よって、調査所見と概ね一致する。

一方、四方背戸割遺跡の土坑SK1001より採取された試料の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で $2,115 \pm 20$ yrBP、曆年代で $2,147 \sim 2,001$ calBPの値が得られた。本遺構は発掘調査結果から弥生時代の可能性が指摘されており、得られた年代値は弥生時代前期～中期頃に比定される。よって、本遺構の結果も調査所見と一致する。

なお、それぞれの炭化材はツツジ科、ハンノキ属の可能性が指摘された。これらの種類は、本地域の周辺に一般的であることから、周辺で採集可能な木材を利用した可能性がある。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 斎藤崇人)

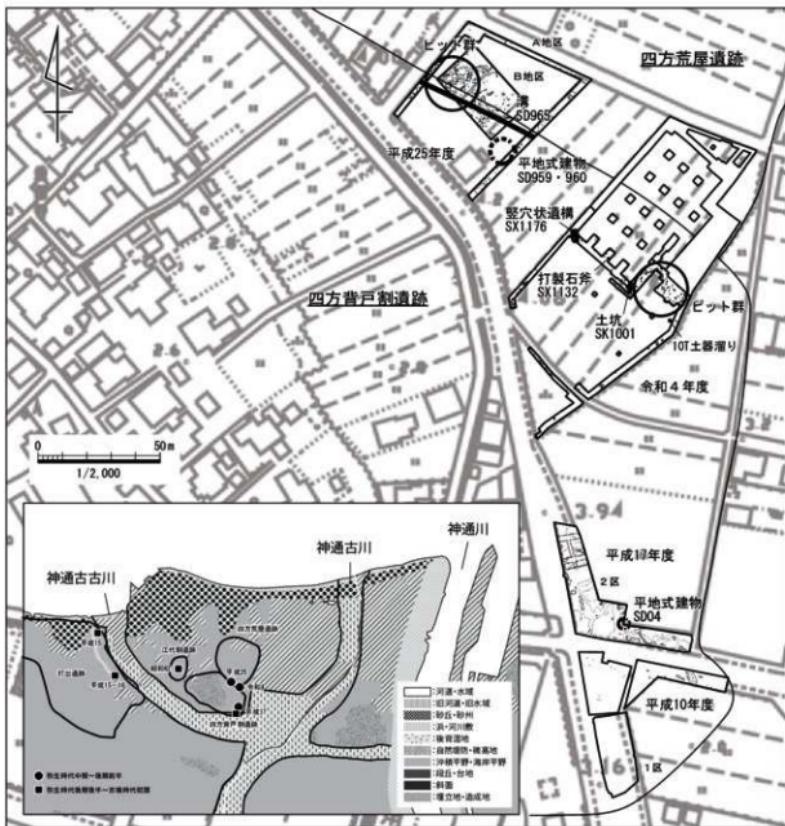
#### 引用文献

- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney, C., Wacker L., Adolphi F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friederich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

## 第5章 総 括

### 第1節 弥生時代

四方背戸割遺跡の下層調査において、弥生時代中期の土坑 SK1001 を検出した。また上層遺構に混入した弥生時代中期の土器片も一定量あり、調査地区周辺に弥生時代中期の遺構が存在することが想定される（第36図）。調査区の北東部 L14～016 グリッド付近には、径 20m ほどの広がりをもつピット群が存在する。SK1001 はピット群の西端に位置する溝状の土坑で、またピット群の南端には同じく中期の弥生土器がまとまって出土した試掘トレンチ 10T がある。同じ径 20m 規模のピット群を囲むように土坑（溝状を含む）が存在する様子は、隣接する四方荒屋遺跡の平成 25 年度調査でも認められ（富山市教委 2014）、調査地周辺には弥生時代中期の複数のピット群が存在する可能性がある。



第36図 弥生時代中期の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

遺物や炉跡が未検出であることから、ピット群を建物跡と判断するのは現状では難しく、平成25年度調査で平地式建物の周溝と想定されたSD959・960や平成17年度調査の四方背戸割遺跡の周溝状の溝SD04（富山市教委2006a）、今回の調査で検出した6本柱の竪穴状遺構SX1176などを念頭に、中期の建物跡が今後明らかにされることが期待される。遺跡内では打製石斧の製作も行われていたと考えられる（SX1132）。また平成17年度調査の栗林式土器、今回の調査で出土した貝田町式土器は、中期における他地域との交流を示す遺物である。

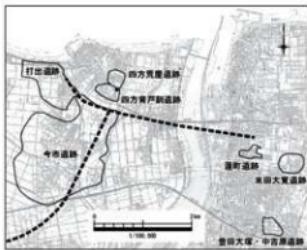
中期の遺構の上には基本層IV層の堆積がある。IV層は神通古古川の氾濫に由来する堆積層と考えられ、今回の調査ではほとんど遺物を含んでいなかった。IV層中の唯一の遺物といえる壺（45）は著しく摩滅しており、氾濫に伴って混入した可能性が高い。平成25年度調査の四方荒屋遺跡SD965は弥生時代中期の直線的な溝であるが、有機物を含む黒色土がみられずにIV層に近い土で埋没しており、遺物には天王山式を含む後期前半の土器が少量含まれる。SD965は後期前半に洪水で埋没したと判断される。周辺の江代割遺跡・打出遺跡においても後期前半の土器は散見されるが、いずれも包含層からの出土であり、明確な遺構は検出されていない。後期前半は洪水が繰り返される湿潤な環境へと変化したことが想定される（小黒2015）。四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は平成17・25年度調査と今回調査で天王山式土器が出土し、後期前半の土器の大部分を占めている。その分布状況は中期の遺構分布と重なっており、中期の集落が後期前半まで継続したことを示している。

神通古古川沿岸の弥生時代において、本遺跡周辺にはいち早く集落が形成されたが、頻発する洪水が収束した後期後半には対岸の打出遺跡で本格的な集落形成が始まる。打出遺跡では後期後半～古墳時代前期までの多様な遺物が出土し、鉄器の保有状況などから神通川河口付近における交流拠点としての性格が指摘されている（富山市教委2006b）。本遺跡周辺は、平成17年度調査の包含層から後期後半～古墳時代初頭の土器が大量に出土したものの、現状では建物跡の検出には至っていない。

## 第2節 平安時代

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡においては、これまで古代の遺構・遺物がほとんど確認されていなかった。平成8年度の四方荒屋遺跡において、9世紀代の土師器・須恵器が少量出土した程度であった（富山市教委2000）。今回も広い調査面積に対して、須恵器の出土は数点に留まり、本遺跡における須恵器の少なさを踏襲する結果となった。土師器は調査区全体に塊ないし甕の細片が散在するが、SK94・95では9世紀後半の塊がまとまって出土した。塊の多くは赤彩され、灯明皿として使用されている。遺物が出土しなかったSK96も含め、2.5mほどの範囲に土坑が存在することから、同時期の土坑と考えられる。

今回の調査地点は、神通古古川を挟んで今市遺跡で検出された古代道路状遺構の北側延長線上にあたるが、古代の道路跡や溝は検出されなかった。打出遺跡から南下する古代道路と交差して途切れるものと考えられる（第37図、富山市教委2006b・2013b）。四方荒屋遺跡の平成8年度調査で古代の柱穴を9世紀代の竪穴状遺構が切っているように、本遺跡周辺は平安時代には畠地として利用され始めたと考えられる。SK94・95は、生産域のなかにあって灯明皿を使用した何らかの行為が行われたことを窺わせる。



第37図 古代道路推定図

### 第3節 中世

今回の調査で検出した中近世の畠跡は、南北畠（A群）と東西畠（B群）に分けられ、両者が交錯する状況であった。四方荒屋遺跡ではこれまで畠跡の調査事例があり（平成8・11・25年度）、南北畠ないし東西畠が検出されている。断面観察によると東西畠が南北畠より古く、同様の新旧の切り合いで平成8年度第2地区でも確認されている（富山市教委2000）。また平成11年度F・G地区では東西畠のみを検出したが、中世のある段階で掘立柱建物や井戸を伴う居住城へ変化している。さらに北に隣接する四方北窓遺跡で検出された畠跡は中世のものとされ、東西畠である（富山市教委1999a）。このような状況から、東西畠は中世を主体とするものと判断される。

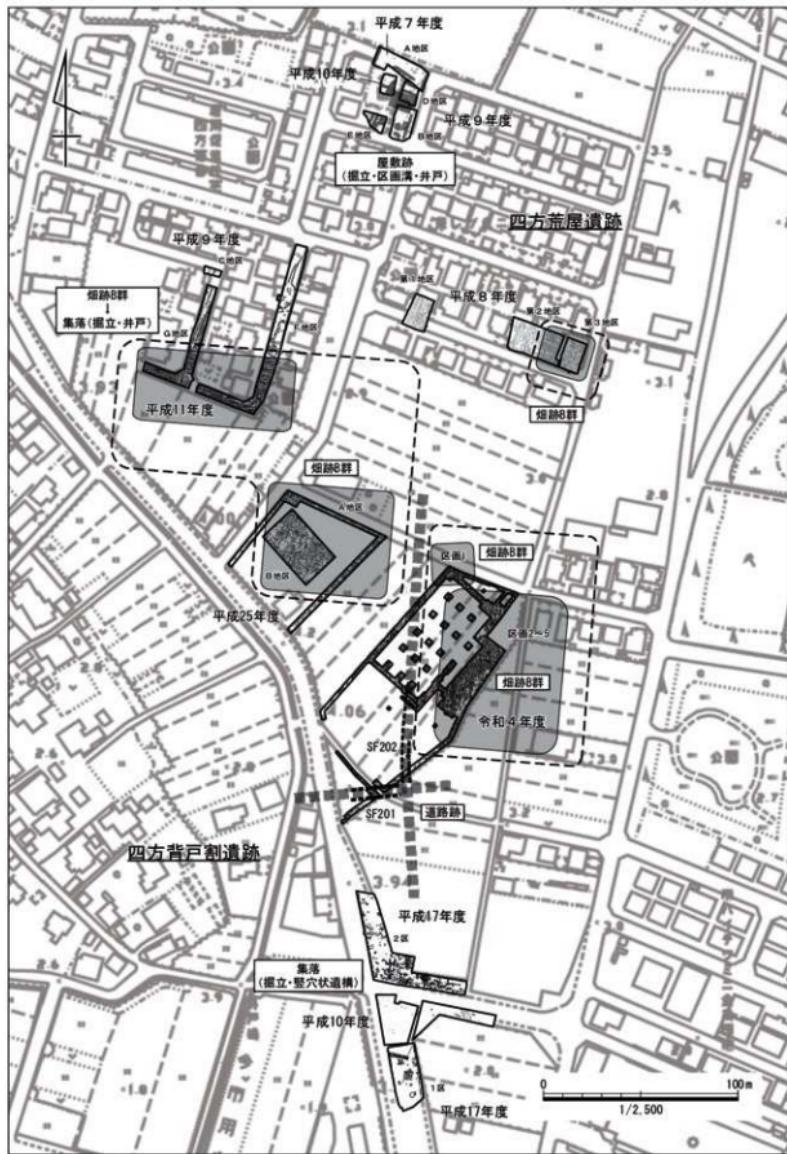
中世の道路跡SF202はやや東に向きを変えながら北へ延びているが、その先は大型建物と倉庫・井戸を伴う中世屋敷（富山市教委1999a・2008a）へと至る可能性がある。南は中世の掘立柱建物群を検出した四方背戸割遺跡1・2区（富山市教委2006a）の集落へ向かう（第38図）。SF202は屋敷と集落を結ぶ道路跡と位置付けられ、その両側に東西畠の畠跡が展開する。屋敷の前面となる北側と東西の道路跡SF201より南側には東西畠の畠跡は検出されないことから、最大で200m四方（4町歩）の畠跡が想定される。東西畠の畠跡は14世紀以降とされる屋敷と同時期と考えられるが、13世紀代の珠洲も散見することから、時期が遡る可能性もある。平成9年度調査の四方荒屋遺跡では中世屋敷から12世紀後半～13世紀前半の白磁碗が、今回の調査でもSK125から白磁碗が出土しており、この時期に中世屋敷の前身集落が形成されていたことも想定される。

SF201はSF202と調査区外で直交する位置関係にあるが、SF202より規模が大きく、少なくとも2回の掘り直しがある直線的な道路跡である。西側は四方荒屋の集落から旧神通川流路を越え、打出集落の南方に向かう方位である。同所は平成15年度調査の打出遺跡（富山市教委2004）にほど近く、同調査では13～14世紀の掘立柱建物や井戸、15世紀の道路跡が検出され、四方荒屋遺跡の屋敷と同時期に存在した集落である。SF201は両者を結ぶ、より広域の道路跡と位置付けられる。またSF201の北側溝SD01は水路としても利用されており、当地が排水性が極めて高い土地であること、畠跡の上手に位置することから灌溉用水路として機能したことも想定される。東西畠の区画1は他の区画と異なって方位が西に寄っており、その方位がSD01と近いことから、東西畠のなかでも新しい時期のものと考えられる。16世紀後半に発生した神通川の流路変更に伴う洪水により、中世屋敷や畠跡は廃絶したと考えられるが、SD01ではわずかであるが肥前の出土があり、最終的な埋没は近世まで下る可能性もある。

中世の畠跡（東西畠）は畠溝の重複が少なく、畠溝覆土に含まれる地山塊が近世の畠跡（南北畠）に比べ大きいなど、近世の畠跡と比較したときに、耕作面積や期間がより限定的な利用であった可能性がある。

### 第4節 近世

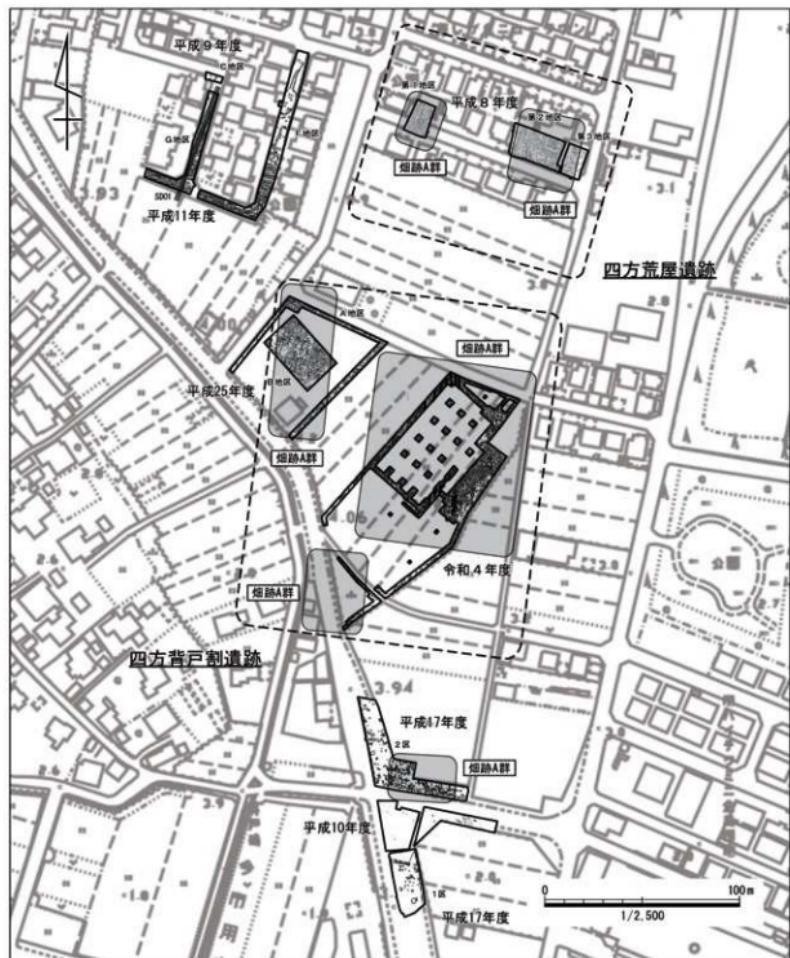
近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡は南北畠の畠跡が広く展開すると考えられる（第39図）。ただし畠跡の畠溝から近世遺物が出土することは稀で、今回の調査でも上層遺構検出面や近代以降の溝から若干の近世陶磁器が出土したもの、畠溝からの出土はなかった。平成8年度調査の四方荒屋遺跡では、第2地区的畠跡から近世遺物が出土したとの記載がある（富山市教委2000）。畠跡検出面上の包含層では、平成7・9年度調査の四方荒屋遺跡で17～18世紀を主体とする越中瀬戸、肥前、唐津が（富山市教委2008a）、平成25年度調査の四方荒屋遺跡では、18世紀後半から19世紀とされる越中瀬戸、肥前、泥面子（加工円盤含む）などが出土している（富山市教委2014）。このような断片



第38図 中世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

的な遺物の出土状況に加え、1858年の飛越地震による灰褐色噴砂（富山市教委1999a）との切り合いで、南北畝が噴砂より古いことが今回の調査で確認されたことから、南北畝が近世の畝跡である可能性がより高まったといえる。

南北畝は今回の調査と平成25年度四方荒屋遺跡の調査で一つのまとまりがある。そのなかには東西幅およそ20mを基準とする南北に長い短冊形の区画が複数ある。一部には東西幅40mほどの大区画や、底面に工具痕が残るやや深い畝溝が集中する部分など、各区画は一様ではない。中世の東西畝



第39図 近世の四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡

に比べて畠溝の重複も多く、畠溝に含まれる地山塊の粒径も小さくなることから、畠立てを繰り返しながら、畑として長期間利用されたことが窺われる。また平成8年度調査の四方荒屋遺跡でも南北畠のまとまりがあり、あわせて一つの畑跡になる可能性がある。その場合は、少なくとも6町歩（南北300m、東西200m）ほどの耕作面積が想定される。また南側では平成17年度調査の四方背戸割遺跡2区の畠状遺構があり、埋没が進んだ神通古古川の沿岸近くまで耕地が広がる様子が窺われる。

中世の東西畠が近世になって南北畠に変わることは、中世後期に再び洪水が頻発し、河跡湖的な状況であった神通古古川が完全に埋没したことが影響したと考えられる（小黒2015）。周辺の用排水は、北流する神通古古川に沿った方位に切り替えられた。平成9年度調査の四方荒屋遺跡G地区SD01は越中瀬戸が出土する幅2.4mの大溝であるが、畑跡と同じく南北に延びることから、近世の農地を支える基幹的な水路であったと考えられる。

本遺跡周辺は神通古古川・神通古古川とともに近い位置にあり、両者の影響を強く受ける場所であったことは想像に難くない。各時代の遺構の消長は、この両者が引き起こす洪水など自然環境に大きく左右されたことであろう。洪水堆積物が形成した自然堤防上では、水はけの良い土地を生かして、各時代を通じて畠地としての利用が盛んであったことが分かる。

(常深)

#### 引用・参考文献

- 小黒智久 2015「弥生時代後期～古墳時代前期の河川環境と遺跡動態－富山市打出遺跡焼却建物跡S101の発掘調査成果が示す諸問題」『富山市考古資料館紀要』第34号 富山市考古資料館
- 小栗田淳 1986「治泉作為広郷の「越後下向日記」と越中の新路」『富山史壇』第92号 越中史博会
- 中世岩瀬戸調査研究グループ 2004「『海中から中世岩瀬戸を探る』15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号 富山市日本海文化研究所
- 富山県富山県振興センター・富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書II』
- 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2014『小竹貝塚発掘調査報告』
- 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2015『打出遺跡発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 1974『富山市小竹貝塚範囲確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 1987『長岡松林遺跡』
- 富山市教育委員会 1996『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1998『史跡北代遺跡発掘調査概要II』
- 富山市教育委員会 1999a『富山市四方舟戸I削遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1999b『富山市千原崎遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999『富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要』3/29
- 富山市教育委員会 2000『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会・環境事業団富山建設事務所 2003『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006a『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008a『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008b『富山市八町II遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡 百塚住吉D遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要V－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』
- 富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2013a『富山市四方舟戸I削遺跡発掘調査報告書』3/15
- 富山市教育委員会 2013b『富山市今市遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2015『富山市八ヶ丘A遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2020『富山市番神山古墳・番神山横穴墓群・糸羽山古墳群発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2022『富山市番神山横穴墓群・糸羽山古墳群発掘調査報告書』
- 西井龍義・藤田富士夫 1976「糸羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号 富山考古学会
- 根津明義 2006「越中國射水郡における諸都の所在について」『富山史壇』第149号 越中史博会
- 古川知明 2005「神通川底出土遺物のこと」『草島校下の歴史』第50号 草島校下郷土史会
- 古川知明・野坂好史・小林高太・瀧沼優介 2010「富山城主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第29号 富山市考古資料館
- 堀沢祐一 1996「北代加茂下III遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』No.30 富山市考古資料館
- 堀沢祐一 1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察－北代加茂下III遺跡掘立柱建物の検討－」『富山市考古資料館紀要』第16号 富山市考古資料館
- 山本信夫 2000?4、「陶磁器分類」『大宰府奈良跡 XV』太宰府市教育委員会
- 吉岡康輔 1994「中世須恵器の研究」吉岡弘文館



調査地区全景（上層完掘、空撮、北から）



調査地区全景（四方荒屋遺跡上層完掘、空撮、北西から）



調査地区全景（四方背戸割遺跡上層完掘、空撮、北東から）



調査地区全景（四方背戸割遺跡下層完掘、空撮、南東から）



調査区南東部（北東から）



調査区南東部（南東から）



調査区北東部（北から）



調査区北東部（東から）



調査区北部（北から）

写真図版4

遺構(4)

四方荒屋遺跡



調査区南東部（北東から）



調査区北東部（東から）



調査区南東部（北から）



調査区北西部（北東から）



K6 区（北東から）



K9 区（南西から）



K13 区（南西から）



SK94 完掘（西から）



SK95 完掘（北から）



SK125 完掘（東から）



SK130 完掘（北西から）



SK131 完掘（南東から）



調査区北東部（北東から）



調査区北東部（北から）



調査区北東部（北東から）



調査区北東部（北から）



調査区北東部（南東から）



SD01・164 完掘 (SF201、東から)



SD01 完掘 (東から)

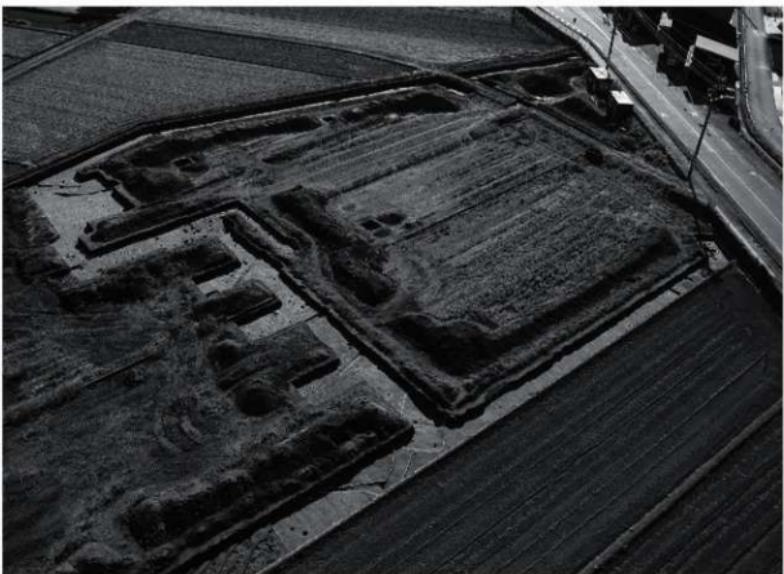


SD09・14 完掘 (SF202、北から)



畝溝底面の凹凸 (北から)

写真図版 8  
遺構(8)  
四方背戸割遺跡下層



調査地区全景（北から）



調査区北東部（東から）



写真版  
10

遺構  
(10)

四方背戸割  
遺跡下層



SX1176 完掘（東から）



SX1176 完掘（北から）



SX1206 碟出土状況（北から）



SX1132 石器出土状況（東から）



地割れ・噴砂検出状況（東から）



噴砂断面（北西から）

SK94



SK95



1

5

SK95



6

SK125



13

SK94



4

3

2

SK95



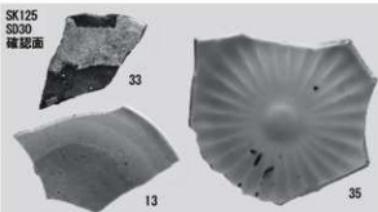
10

9

7

8

11

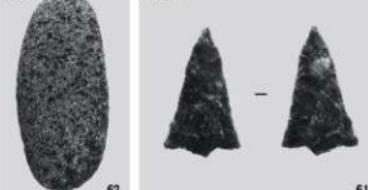
SK125  
SD30  
確認面

33

13

35

SD176



62

61

SD115  
SD118  
SD120  
確認面  
残土

60

55

32

25

58

57

51

29

SK95



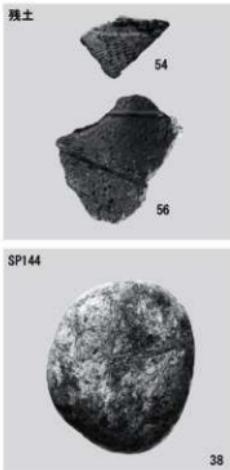
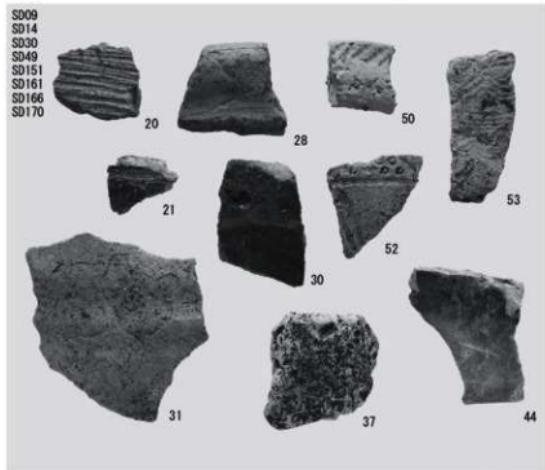
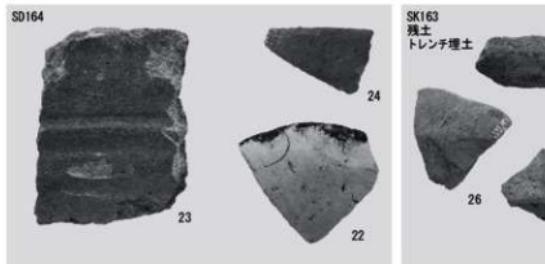
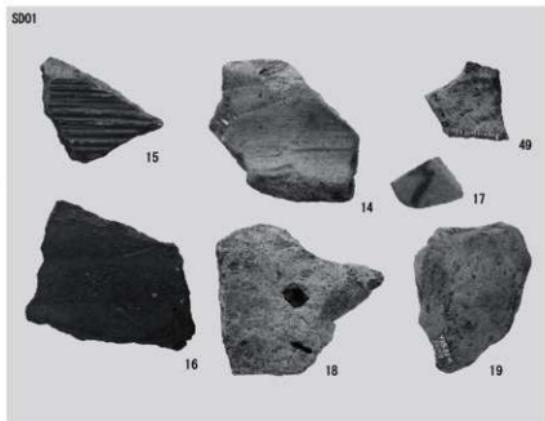
12

SK94・95・125、SD30・115・118・120・176、確認面、残土出土遺物

写真図版 12

遺物(2)

四方背戸割遺跡



SK163、SD01・09・14・30・49・151・161・164・166・170、SP144、残土、搅乱、トレンチ埋土出土遺物

SK1001



SK1001



40

SK1001



41

SK1001



42

SD155  
SP156



39

43

確認面  
IV層



46

47

48



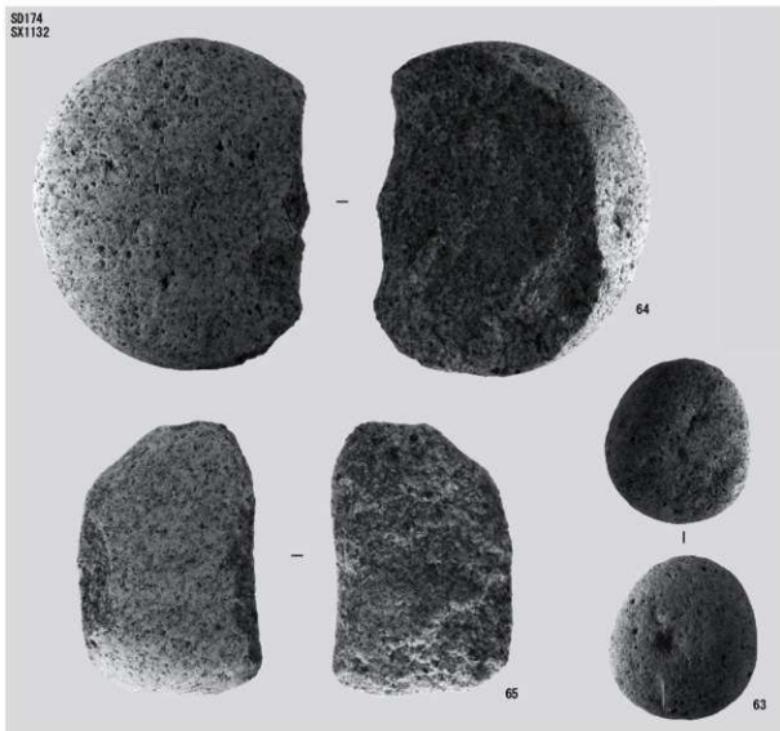
45

SK1001、SD155、SP156、確認面、IV層出土遺物

写真図版 14  
SD174  
SX1132

遺物(4)

四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡



試掘



試掘



試掘



SD174、SX1132、試掘調査出土遺物

## 報告書抄録

富山市埋蔵文化財調査報告 111

富山市  
四方背戸割遺跡・四方荒屋遺跡  
発掘調査報告書

—店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2023（令和5）年9月30日発行

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒939-2798

富山県富山市婦中町速星 754 番地  
(婦中行政サービスセンター本館3階)

Tel 076-465-2146

Fax 076-465-5032

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編 集 有限会社毛野考古学研究所 富山支所

〒939-0351

富山県射水市戸破1679-3-A

Tel 0766-57-1618

印 刷 株式会社中村